

The page features three large, overlapping blue circles of varying shades (dark blue, medium blue, light blue) arranged diagonally from the top right to the bottom right. Thin blue lines extend from the top left towards the circles, and another line extends from the top right towards the middle circle.

# 福沢諭吉「民情一新」

脚注版・現代語訳

「天下衆人の発達」とは「民情一新」と言い換えることができる。蒸気船車、電信、郵便、印刷の四つの発明が民情を一新させた。この発明が文明開化の原動力になり社会を大きく変動させている。「民情一新」は「文明論之概略」の続編にあたるもので、「概略」を具体化させた論文である。

三 浦 良 訳

2009年6月22日

目 次

緒言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

第一章 保守の主義と進取の主義とは常に  
相対峙してその際に自ずから進歩  
を見るべし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

第二章 人間社会の種族中、いずれか保守  
の主義に従いいずれか進取の主義  
に従う者ぞ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

第三章 蒸気船車、電信、印刷、郵便の  
四者は 1800 年代の発明工夫に  
して、社会の心情を変動する  
利器なり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19

第四章 この利器を利用して勢力を得るの  
大なるものは進取の人にあり。  
ロシアおよびその他の例を見て  
知るべし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25

第五章 今世において国安を維持する法  
は平穩の間に政權を授受するにあり。  
英国及びその他の治風を見て知るべ  
し・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36

## 緒 言

西洋で文明開化が進んだ理由

世論は皆西洋諸国は文明開化である、と言っている。その言葉はそのとおりで、私もまた違うとは言わないが、漠然と文明開化とって、その文明開化の理由となる事実をはっきり指し示さないと、これを学び、採用するに当たって、大きな過ちがないとも限らない。そもそもかの文明開化は、土地の広狭、人口の多寡でないことは勿論のことで、徳教の盛衰でもなく、文学の前後でもなく、理論の深浅でもない。試みに、アジアとヨーロッパとを比較して、東西で行われる徳教の趣旨に何らかの差別があるだろうか。キリストも孔子も釈迦も、正しいと言えば正しく、よこしまといえどもによこしまであり、お互いにこれを議論しても一場の宗門論争に終わるだけである。文明開化の深浅には縁がないものである。また、西洋の文学とシナ日本の文学を比較して、流儀こそ違ってもその巧拙は決められるものではない。ただ東の文学に上手な人が西の文学を知らずにそれを拙いと言い、西の文学が上手な人が東を知らずに拙い文章というと言うだけである。その上手下手、うまいまいは他にあるのでなく、各自が知っているか知らないかにあるのである。文学の前後によって決して文明開化の標準にはできない。ましてや理論の深浅でもできない。西洋の理論は決して深いものではない、東洋の理論も決して浅いものではない。その深遠なるものは、かえって昔のインドにあると言えるかもしれない。西洋諸国の文明開化は、徳教にあるのではなく、文学にあるのでもなく、また理論にあるのでもない。どこにあるのか。

交通の便の向上が文明開化を進めた

私がこれを見ると、その人民交通の便にあると言わざるを得ない。東西の人類が互いに交通往来するものを社会という。社会に大小があり、活発なものと無力なものがあり、すべて交通往来の便不便によらないものはない。交通の便によってあたかも人を摩擦し刺激してその信心を活発にさせると、二度と物静かに平安に戻ることはできない。

これを譬えんと、山に独り住んで浮世を逃れて静かに暮らしている人はその心も自ずから虚無で、求めるものも少ないが、この幽人を街の騒々しいところへ移らせたなら、その心を虚無にしようとしても決してそうできないで、耳目鼻口の働きは自然といつも世俗に届いてしまう。風流にいえば、一人の幽人を俗化することになるが、文明の点からこれを評すると、その人の心身を活発にして実際の場所で働いたものとなる。

人間社会もまた同じようなものである。交通の便を開くのは人の心身に実際に役立たせる一大要因で、人心が一旦実際に役立つときはその社会で

行われる文学、理論などを利用することになる。だから、東西の文学、理論を比較して、その前後や深淺に差がないといっても、甲は実用に遠く乙はそれに近いという区別があるのは、その原因が遠く社会交通の便不便にあると言わざるを得ない。東洋の風流人の評論に、西方の文学理論は田舎びていると言えるかもしれないが、その田舎びた様子が今の文明の有様で、人事身体の動力と認めざるを得ない。

社会交通の大切さは、このようなもので、西洋諸国では、以前から航海術を研究して百千年来その人民が北海、地中海の各地方を往来しただけでなく、遠く大洋を渡って、地球上行かないところがないほどである。物を貿易し、人を移住させ、風俗も全く異なる国へ行って、言語も通じない人と交わり、言葉で表現しがたい苦勞もあったろう。その心身を切磋琢磨し、見聞を広め、それによって活発進取の氣風を養った利益は、東洋人がこれまで知らなかったことである。だから、西洋諸国の文明開化は交通便利の一原因によるもので、西洋諸国は開明である。どうしてかという交通が便利だからである。東洋諸国にはいまだ開明に至らないものがある。どうしてかというとなお交通が不便だからと言える。

4 つの発明が民情  
を一新した

それなのに、1800年代に至り、蒸気船、蒸気車、電信、郵便、印刷の発明工夫によって、この交通手段に長足の進歩があったのは、あたかも社会を転覆するものだった。本編は、主にこの発明工夫が民情（民心）に及ぼした影響の様子を論じて、蒸気船車、電信、郵便、印刷の4項目に区別したが、実際は印刷も蒸気機関を用い、郵便を配達するにも蒸気船車を用い、電信も蒸気によって実際の役に立つので、これを単に蒸気一つだけの力にまとめて、人間社会の運動力は蒸気にあるということもできる。近年の文明は蒸気の文明ということもできる。蒸気がひとたび世間で行われて以来、実際に旧物を転覆したのは勿論のことで、人事の是非得失を論じるにも昔の賢者を参考にして判断することもできない。まさに今日は世界が一新された最初の年ということもできる。

蒸気電信の力は古  
いものを廢し、す  
べてを變革し尽く  
す

昔西洋人がゆっくりした遅い帆船で、やっとな遠方の各地へ行って、人民に活発な氣風を生じて、東洋人を追い抜いた。ましてや今後、この蒸気船車を使って地球上の海陸を走り回り、電信、郵便、印刷の利器を得て、思想を伝え広げていくとその勢力の増進は測り知れない。一新また一新、一變また一變、ついには旧物を廢滅して、變革し尽くすまでは止むことがないだろう。その際に、少しでも旧慣を維持して古俗を残そうとするのは、かろうじて改進急變の震動を抑えるもので、臨時の策に過ぎない。

これを知らずに、儒者は徹頭徹尾旧物を守り続けて、大勢の方向に衝突する。軽薄児が古風を装い一時的に欺いて社会の大計を誤るなどは、まことに奇怪なことである。そうであっても、大勢はあたかも世の中を乗せた船のように、滔々と揺れ動く心情の間において、独りこれに抵抗し、独りこれを騙そうとするのは、船に乗りながら動かないことを望むようなもので、その策が拙くて心根が卑しいことは言うまでもない。この腐った儒者や軽薄児も遅かれ早かれ、結局、船に乗せられるのである。

蒸気電信の勢力はこのようなものだが、特に西洋人の私有物ではない。発明は西洋だが、西洋人も自らこれを発明し、今日少しだけその効用を試みてその勢力が強大なことに驚き、また狼狽している。西洋人がこの利器を発明したのは鳩が鷹を生んだようなものである。雛の鷹も羽ができて空を飛んでたくさんの鳥を捕えて、時には生んだ親をおどすこともあろう。母鳩の驚きや狼狽もまた理由がある。こうしてこの鷹が生まれてわずか 50 年くらいしかたたず、その勢力が実際に現れたのは 2, 30 年足らずである。今日では世界中で共有されるものだから、各国人民の気力に応じてうまくこれを利用する者はこれで人を支配し、そうでない者は人に支配されるだけである。

鉄は文明開化  
の塊

私は、以前次のように言ったことがある。鉄は文明開化の塊である、と。まさしくそれはこの意味である。今後我が日本でも、鉄を掘り精練して、柔らかい鉛を取り扱うようにこれを自由自在に扱い、鉄道を敷き、電線をかけて、船を作り、武具を作り、什器を作り、人が必要とする品物のすべてを鉄をもとにして製作するようになって、始めて文明開化の日本を見ることが出来る。ただし、人民に気力が生まれてその後によく鉄を用いるか、あるいは鉄を用いてその後によく気力が生じるか、この点についてはきっと世間では議論が生じるだろう。私もまた、これを考えないわけではないが、本編の趣旨ではないので、これは他日の議論に付すことにする。

急速に進む民  
情の変化

前に述べたとおり、西洋人は蒸気電信の発明に出会ってまさに狼狽している。その狼狽とは何か。民情の変化にある。老人は少年が活発でその心事が早熟なことに驚き、金持ちは貧者の謙虚のなさを憤り、また一方ではその思想が優れていてしばしば言論に道理があるのを見て感服し、政府は人民に苦情が多く満足することがないことを心配し、また一方ではその気力が活発でともに国を守るに十分であるのを見て喜び、喜ぶがごとく、憂うるがごとく、憤るがごとく、感服するが如くで、要するに、ただ狼狽するにほかならない。かの英国の風俗は最も今日の民情に適するといつて、なおその上に民情変化

---

の兆候を見せて、人夫がストライキと行って、仲間と結託して賃金を高くするために職に就かずに雇主と交渉するなどの風が近來ますます盛んだと言う。貧しく、卑しい者の心事が次第に異常になるのを見ることができる。また、同国のジッポン・ウオークフィールド氏が出版した植民論に次のように言う。

チャーチスト運動と社会主義は人民の不平の兆候

人民の教育を称賛するのは最近の流行で、社会の多くの善はすべて教育から生じると言わない者はいない。私もまた同説で、こうあって欲しいと希望しているが、残念ながら今日に至るまで、未だに一つの善も見たことがない。下民の教育は、その身の幸福を増さず、かえって心の不平を増すだけである。わが国の普通教育の成果としてみるることができるものは、チャーチズムとソーシャリズムの二つの流行があったことだ。(この主義は、フランスその他の国々で行われる社会党と大同小異で、どちらも下民の権利を主張して、富者を平均し、議員選挙の法律を改革するなどの説で、結局貧賤に加担して富貴の権利を侵害するものである。)

警察官吏は、その連中の説を圧倒するのはたやすいといい、またある人の考えでは、この仲間のごく少ないので心配するに足りないと言う者もいるが、私は決してそう思わない。上記の二つの主義は、結局、人民の不平心を表す兆候で、その人民は人夫の間に教育を受けることが最も多くて、いわゆる土着の民から最も遠くにいるものである。この様子から考えると、今後教育が次第に広がっていくと、正しくその割合に準じて、貧賤の権利説もまた次第に広がって、教育が一步進めば不平も一分増え、ますます増進して、富貴の権勢とその私有を犯し、ついには国の安全を害することになる。また危険でないわけがない。云々。

これは植民の法を推薦する弁論中にこうした有様だから早く過剰人口をよそへ移すべきという説で、本編とはその趣旨が違うが、英国の民情の一端をうかがい見ることができる。だから今日の欧州各国は、人智が進歩したために社会の騒動が生じて、朝廷と民間の両方とも未だにその方向が定まっていないことが明らかである。今後の成り行きを考えると、物価もさらに上がることだろう、賃金の割合、利息の法も次第に改まるだろう、文学、技芸、商売、工業などすべてが人事に影響を及ぼして、ついには政府の政治の方向も一変するのは疑う余地もない。フランス民法にも不都合な条項が見出されよう。ロシア、ゲルマンの警察法も無力なことがわかるだろう。いわゆる驚き狼狽する世の中と言える。

ところで、不思議なことは、我が日本の普通の学者論客が西洋を盲信することである。十年来、世論の向かう方向を考えると、ひたすらに西洋の事物を

称賛し、敬い慕い、心酔し、甚だしいのはこれに恐怖し、少しも疑いの念も抱かず、一も西洋、二も西洋とって、ただ西洋のやり方を手本にして、小は衣食住居のことから大は政令法制のことまで、疑わしいのは西洋を標準にして得失を評論する者である。甚だ異様である。今日の西洋諸国は、まさに狼狽して方向を迷っている。他で狼狽するものをもってきて我々の進む方向の標準にするのは、狼狽の最も甚だしいものではないか。

某家で失火した。主婦が急に立ちあがって、慌てふためいている。金庫が大切なことを忘れて、たった一個の行燈を携えて、道端でうろうろする。また某家の主人が急病にかかった。家人は医者を呼ぶのを後にして、まず遠方の親戚に連絡した。いずれも皆、狼狽して火事や急病に対処する標準にはならない。我が日本も、西洋の文明を論じるに当たり、この主婦、家人の例を学ぶものがないと思っはいけない。いたずらに世界の識者の嘲笑を買うだけである。故に私は西洋が文明でないことを説くのでなく、その文明は特に最近の文明にあることの意味を述べる者である。そうして、その最近の文明は蒸気の発明によって生まれて、その発明が世界各国の民情に影響を及ぼして、あたかも人民を一新したので、この一新の実況に応じてことに対処する者が初めて一緒に文明を語ることができる。本編の立論の主旨はただこの一義にある。

また終りに一言を書き記す。以上のように本編は、蒸気船車、電信、印刷、郵便の四者を最近の文明の元素として論をたてるが、文明の事物はとても多く、必ずしもこの四者に限らないという説もあろう。もしその説があれば、学者は試みに、今の西洋の文明を敬い慕うべきもの、恐怖すべきものとして先に考えを決めて、その後不可思議な因縁によって世界中からこの四者をなくすか、または人類にこの四者の用法を忘れさせることが出来るならば、その時にもなおあの西洋諸国に敬い慕うべきものや恐怖すべきものがあるだろうか。きっと何も無いことがわかるだろう。たとえそのほかに見るべき事物があっても、それは西洋にも東洋にもあり、是非長短が各々あって、にわかにはその優劣を判断できない。それならば、今の世界では文明の元素は蒸気以下の四者として支障はないだろう。その旨は縷々本編中にしるしたが、読者の了解をもっと得るために、重複をいとわず、簡単に数行の文字を緒言の末に付しただけである。

明治 12 年 7 月 7 日、著者記す

## 第一章 保守の主義と進取の主義とは常に相対峙して、 その際に自ずから進歩を見るべし

保守主義と進取主義の対立し合う  
これまであったものを保持し、古いことを守って、今の無事平穩をはかることを保守主義という。新しいことへ進み、珍しいものを手にして将来盛んになることをはかることを進取主義という。あるいは改進といってもよい。この二つの主義は、世界で昔からどんな社会でも行われて、各々その働きが知られており、また各々が同時にその働きを盛んにすることはできず、互いに軋轢となり、その軋轢で磨かれる間に少し進歩がみられるものである。もしも両方の働きが平均せず一方に偏ると、天下の物事は頑固に停滞して動かなくなるか、もしくは急激に震動して止まるところを忘れると大いに人類が不幸になることがある。

たとえば徳川 250 余年の太平を見ると、元和<sup>げんなえんぶ</sup>偃武のように一旦天下が平穩になると、朝野ともに平穩無事に慣れて、何一つとして新規に企画されたものがなかった。幕府はじめ諸藩でも、ただ旧法の保守に専念し、あるいは事に当たって法がなければ、先例を標準に決めて、どんな困難な事変に際しても、昔のしきたりと先例によらないものはなかった。要するに、徳川の世は、前例の力が大きくて通例から外れる破格な働きがない時代と言えるものであった。250 年の長い間、寸兵も用いなかった太平は、古来世界中でその例を見ない。この泰平の割合にもかかわらず、文明進歩が遅々としたのは何か。その原因はまさしく保守が頑固過ぎたためといわざるを得ない。

鎖国が保守の弊害を!  
だ  
その事実を数え上げれば枚挙にいとまがないが、今一つその例を示す。寛永年間に、キリスト教を防ぐとして、外国人の渡来を禁止し、我が国の人が外国へ往来することを止め、次いで天草一揆の後は、ますますこの禁令を厳格にして、一定の国法として、またそのために一般の先例習慣となり、どんなに用があっても外国人と交わり外国の事情を知りたいと思う者もいなくなった。文化年間には、ロシアの軍艦が蝦夷地へ来て事を起こし、その騒動の前後 8 年間は国の一大事変ともいえる時だったが、それでも外国の事情調査をする考えがなく、欧文を読んで海外のことを話し合うことは、この時まではほぼ禁制の有様だった。結局、外交を拒絶する先例を頑固に保守し過ぎた弊害といわざるを得ない。

もし寛永の後、たとえ外交は拒絶しても、天下の紳士に対してオランダから届く舶来の書籍でも自由に読ませたら、西洋の事情はペリー来航の前にすでに明らかになっていて、嘉永年間の狼狽もなかったと言える。保守に偏った弊害もまた大きかったと言える。この一点だけについて考えると、当時の社会のためには願うべきことではないが、むしろ 250 年の太平を持続するよりも、その際に 50 年、100 年を隔てて激しい内乱や外国との戦争があれば人心が動揺して、かえって文明の進歩を助ける機会になっただろう。保守の禍も戦争の禍と取引したら、利益になったともいえる。

保守も進取も揺れ戻し  
を起こす

保守の弊害は極めて大きかったが、また一方から論じると、進取が進んで止まることを知らないのもまた、大変恐ろしいものがある。すべて世の中の弊害を直すには、斜めの柱を槌で打ち直すように、1 回目の槌ではまだ直らず、続いて 2 回目を試み、2 回目、3 回目と打ち、打ち過ぎて反対に傾き、行き過ぎたものを直そうと一方から打つと、元の斜めに戻ってしまって、初めから槌をしない方が良かったことになる。確かにこの柱を正しく真直ぐにする方法は、鉛直線を垂らして螺旋の機械を使って、静かにその位置に直すしかない。柱の場合はこの機械を用いることができるが、人事はそうならない。たとえその弊害が明らかで、傾いた柱に類するものがあったとしても、開闢以来、人の知恵と情では鉛直線や螺旋機械のような鋭敏な働きで、その弊害を直した者がいたことを聞いたことがない。これを直そうとすると、直し過ぎて垂直にならず、その行き過ぎたのを止めようとするとも元に戻り、一矯また一矯、あたかも鉄槌で斜め柱の根元を敲くことにほかならない。ましてやその正しい傾きを示す鉛線もなければ直せるわけがない。

1700 年代のフランスの大騒乱も、貴族門閥の弊風に怒ってこれを矯正し、ついにはその矯正が行き過ぎてまた乱暴に陥り、暴力をもって暴力に代えたという非難を受けたものである。また些細な事柄だが、我が国の維新の初めに天下の人心は旧弊を憎む勢いに乗じて、これを矯正し、排除して止まるところを忘れて、日本の在来のものはすべて、無形の制度・風俗も、有形の品物・物件もすべてこれを捨てて顧みることがなかったが、近來になってこれらを捨て過ぎたことがわかり、少し旧に復する様子があるようだ。たとえば名古屋城の金の鯨しやちは、これを降ろしたが又上へあげている。その上下はまさに天下の人心の進退を見るようである。人心が勢いに乗じて忠誠を失う実例を見ることができる。

今の人類の智と情は、世の中の弊害を直そうとして一発一中の明確さが無い。有形の鯨ですらそうだった。無形の制度風俗に至ると、きっとこれよりもひどいものがある。旧を矯正して未だに正に至っていないものもある。すでに正を過ぎて戻ることが知らないものもある。過不足の両端にいてまさにこれが中心と心得々としているものもあるだろう。この段に至ると、ただ人の無知無識を恨むだけである。

徳川時代でも文明は  
少しづつ進んだ

そうであっても、世の文明開化は、次第に進むのが常で退くのはまれである。進むとは何か。進取の主義に依らざるを得ない。進取の主義はその時代では奇怪で人を驚かすが、後世から見れば決して奇怪なことではない。徳川の初代に、武事一方の世の中で藤原惺窩、林道春らの諸先生がもっぱら文学を主導したことはきっと世間を驚かしただろう。また、宝暦明和の時代に前野蘭化、杉田鱧齋先生の流れが初めてオランダの書を講義したのは、当時にはもっとも奇怪だったろうが、後世になると、天下に何人もの惺窩、道春が出て、おしなべて紳士で文学を学ばない者がいれば、かえってこれを怪しむようになって、かの蘭学も時勢困難な折でもこれを捨てずに天保弘化の時代には翻訳出版書も少なからず出てきた。文学の進歩がこれでわかる。(蘭学起源のことは蘭学事始めという杉田氏の蔵版の本に詳しい)

また、昔からの質朴節儉を守って、新しい贅沢を嫌うのも昔から今までの普段の姿で、昔の西陣の織物が次第に精巧になって男女の衣装が日々に華美に変わるのには老人成人が好まないことだと言ったが、今日では職工が巧みになるのは文明のしるしとってこれを褒めない者がいない。

また、瓦ぶきの屋根も今日では普通だが、武江年表(江戸でつくられた年表)を見ると、慶長6年江戸本町2丁目の滝山弥次兵衛なる者が始めて誰よりも秀でた家を作ろうと考えて、表通り半分の屋根を瓦で葺いたところ半瓦弥次兵衛と異名をとったということがあった。当時この町人はその屋根の壮麗さで江戸中の人々を驚かしたのである。

単に贅沢だけでなく、今、はやりの人力車も、今から100年前の寛政年間に中井竹山先生が書いた「草茅危言」に、別駕車べつがしゃとって人力車べつがしゃの一種を道中の宿場で用いたら大いに便利だろうと書いてある。つくったものは違うが今の人力車の工夫であるが、その時代には先生の

説を奇怪として誰も顧みなかったが、百年後の今日になると、天下で普通に流行している。先生の霊も地下で笑みを浮かべているだろう。

進取の力が盛んになると文明も進む

以上のように、新奇なものは容易に人情に合わない。今の人にとって普通なものは昔の人を驚かせ、昔の人にとって奇怪で行われなかったことが今日になってはじめて流行している。今の感覚で昔を思うと、頑なに偏っていて実に笑えることだが、当時では決して笑えないことだった。いわゆる保守主義は、ある種の有力な働きをしてうまく進取の運動を抑え、進取の人たちを一時も自由にさせないのである。そうであっても、前に述べたように、文明の進歩は必ず進取の主義に頼らざるを得ない。徳川時代には保守の力が強すぎて、物事の各部分で見ると前に進んだものはほとんどないような状態だったが、その期間の数十年を隔てて前後を比較すると、必ず大いに進歩したものを見ることができる。進取の力もまた盛んと言える。

そうすると、進取は積極の働きで、保守は消極の働きといわざるを得ない。実際の利益は積極にあって、この利益をとる方法を緩和し又は節制するのは消極の働きである。実際に世界の人々の教育が上達していわゆる聡明英知の域に達することになれば心が望むところへ進み、意にあったものを取り、節制も必要なくなるが、私の所見では、数千百年の後、いつになったらその域に達せられるかは保証できない。ただ今の有様では、進んで文明をとる道を本来のあり方とし、物事が今日行われぬのはもとから覚悟の上だが、敢えてこれを問わずに、あたかも策を今日たてて勝ちを数十年後に期待するだけである。

また、進取の主義でもただひたすら旧を捨てて新に走るというわけではない。その真意は前に述べたとおり、進んで文明をとる意味だから手段を選ぶ上で初めから物事の新旧を問うべきではない。新奇は当然とるべきだが、あるいは旧物を保存し、または変形して、進取の道に利用できるものも多い。ましてや、今の人智の有様で、万代の後を洞察する力は初めから望めない。ただ数十年の未来を予測して、少しでも便利だろうと思うものをとるほかに方法はない。

たとえば、これを政治上で論じ、ずっと先に期待しか期待できない想像社会なるものを考えると、まず人間社会に国を分けることも無用となる。政府をたてることも無益になる。国もなく、政府もなく、どうして国君が必要になろうか。どうして官吏を用いようか。ましてや爵位等級など

は単に子供の遊びに過ぎない。このように論じてくると、今の人間のすべてのことが全部無益な徒労になってしまう。進取の主義もこの想像社会を目的に進むならば、ほとんどこの世でなすべきこともなくなり、人事を虚無にするほかに方法がなくなるが、今の世界の文明は、その年齢も非常に若くてそのことについてとても未熟である。本当に子供のようなものであるなら、この子供の有様に向かって進む方法があるだけである。

故に今日文明を語るものは、万年先を考えず、千年先も考えず、わずかに十数年の間に見込みがあれば、熱心にこれに取り組みざるを得ない。少年で無学なものはややもすると進取の議論をすると激しすぎて、かえって世の嘲笑をかい、人の信用を失うことがある。結局、あの想像社会を心に想像するだけでなく、時として実際に行おうとする気持ちをもって、あるいは実際に行おうと企てて、このためにその言行がしばしば回りくどいものがある。今日の我が国で少しでも民権論のきっかけを開けば、すぐに朝野から疑いが起きて、あるいはこれを指して共和政治論といいあるいは政府に敵対するものとしてひっくるめて退けられる弊害もある。民権論のためには嘆かわしいことである。論者のためには残念なことである。

## 第二章 人間社会の種族中、いずれか保守の主義に従い、 いずれか進取の主義に従う者ぞ

保守進取の両者は対立し合うという趣旨は前章で論じた。この一章では、社会でどういう人が甲の主義に従い、どういう人が乙の主義に従うか、両者についてそれに従う理由を示す。

都会と田舎の違い

第 1、都会と田舎の別がある。物事の流行はそれに従う人数によって力を得る。人口稠密な地ではその流行が伝わるのが早くて、人数が多くなるのは容易である。人数が多くなって流行が勢いを得れば、もっと勢いを増して、ついには物事の出所に関係なく、ただ大勢の間で流行しているように見える。衣装の流行や歌の流行が広がる勢いは、流行病の伝染と同じである。確かに病が伝染するのも衣装や歌が伝染するのも、その様子は同じで、その理由も同じである。ただ、人口稠密な都会で盛んになる。或いは地方の田舎で新説を唱え、新工夫を企てても、その茂り方はとても遅々として思うようにならないので、広くこれを起こそうとすると、必ず都会を経て一旦流行の勢いを作り、それを延長して地方へ伝えるしかない。様々な流行やその形は都会と田舎の間では 3~5 年の前後があると考えられる。

ゆえに、職人芸人から文人学士に至るまで、都会に住んでいないと、有名になってその説を広げることができない。都会は必ずしも人物を生む土地でなくて、ただこれに住まいを貸す宿屋に過ぎないが、人が大勢いるので、進取の主義はまず都会で行われて、その勢いを盛んにさせざるを得ない。

智愚の違い

第 2、智愚の別がある。有智と無智を比較すると異なる点が多いが、全体をみると、一方は在来の物事に安心して多くを求めず、一方はこれに安心せず進もうとする。一は足ることを知る者で、一は足ることを知らずこれを増やす道を探す者である。智のある職人芸人は、日々新工夫をめぐらし一歩でも先人よりも優れ世間の評判を得ようとし、学者や紳士は一つでも未発見の説を発表して社会を改革しようとして、生涯心に思うことは古人が忘れたものを補い、今の世に不足するものを増やそうとする。大体、和漢洋で著書は多いが、紀事史類（旅行記や歴史書の類）を除くと、その論説は皆昔から今日までの不足を補完して文明へ進もうとするもので、明識と言ひ卓見というのもただ新工

夫をめぐらして新説を唱えるものに他ならない。明識卓見により独立の精神を持つ紳士は全て進取の人といえる。

あるいは、紀事史類の文字だけに心を用いて、古人の説だけを信じる全く無見識な人もいないわけではないが、少し才能があれば、たとえ自分から新説を唱えなくても、他の新説を聞いてそれに驚くことも少なくなり、ついにはその説を信じてこれに入る道もあろう。今日我が国でも西洋の新説を聞いてその説を信奉する洋学者は、全員もとは漢書生だったことをみてもわかる。ただ昔からの慣習を固く守って変えようとしなない人は、無学文盲の愚民だけである。こういう人は百千年の旧習により古いものごとには慣れていて、それに慣れて進退の道を知らず、新説を聞いて驚くだけでなく、ひどいものは驚きもしない者である。これが古いものを守る最もひどい者である。故に、進取の主義に従う者は智人に多く、愚人に少ない。

#### 年齢の違い

第3に年齢がある。少年は情が高く道理に乏しく、老成人は道理は密だが情に乏しい。孔子様が70歳になると守るべき事柄から外れないと言ったのは情が衰えて道理だけが残し、その道理に従って世の中に対処すれば、物事に少しも支障がない有様を、自ら考えて発言されたことなのだろう。ただし聖人は神聖で、年齢にかかわらず、徳義もよく発達し、守るべき事柄を超えない地位に至ることもあろう。また老年になって、自然と勢いよく働くこともあろう。これを良いとか悪いとかいうのは、私の本意ではないので、議論はさておいて、今の世界についていえば、たとえ聖人に至らない凡庸な人も、人々を仮にすべて70歳の老人にすると、世の中には守るべき事柄を超えるものは自然と少なくなって、すべて静謐になり天地は静かになるだろう。ただこの天地で行われるものは、保守主義だけで文明の進歩は遅々としたものになるろう。

そもそも年少の時は、血液の運動も盛んで神経作用も高く、五感の働きはすべて鋭敏だからこれを老体の人と比べると、食べるものも旨く感じ、見るものも美しく大きく見え、嗅ぐものも香り良く感じ、聞くものも面白く聞こえ、天地の間の物事で一つとして愉快でないものはない。いわゆる情が高く、感動が鋭い時代である。逆に、年をとって五感の作用が次第に衰弱してくると、かつてのもので表しても、かつての愉快さを感じなくなる。それだけでなく、かつて感じた愉快さを記憶に残して忘れることがないために、今日同じもので同じ愉快さを

感じないと、その身体が老衰したことに原因を求めないで、かえってそのものの厚い薄いに求めることがある。

たとえば永年他国に住んでいた人が、しきりに故郷を慕い、故郷の味を慕い、故郷の味をたしなんで、故郷の音を喜び、故郷の山水を美しいといい、故郷の城郭や寺院を大きいと言って、実際以上に思う者がいるようなものだ。田舎の老人が江戸の美味を試して田舎料理には及ばないと言ってこれを喜ばないのも一例である。(幼い時に素読を受けた師匠を生涯大先生と思い、一旦主人として仰ぎ見た者は主従の関係を解いた後もなお尊崇する情をもつなど、その例は枚挙のいとまがない。ひそかに考えると、報国の心、君臣の縁、父子の親、師弟関係などいずれも年少で情感が高い時に生じて、生涯忘れることができないものである。また年をとって夫や妻を失い、再婚しても幸福が薄いというのもまた一例である。)

それだけでなく、年をとると、長い間世間の出来事の経験を経て利害得失を見分ける力も成熟し、軽々しく新奇に走ることを好まない。こうして当世の有様に不平を唱え、これも無益、不要、奇怪、法外といってひたすら今日の物事を嫌って、かえって数十年前に自分が年若く楽しかった時の有様に戻そうとするようである。これに反して、血気にはやる少年は、数十年前を知らず、得失を見分ける力に乏しく、今の有様を愉快だとして一層多くを求め、ものを見れば奇といい、かの説を聞けば妙といい、失敗に失望せず、多忙でも困り果てることなく、倒ればまた起きて、失敗すればまた企てて、進むことを知って止まることを知らない。一体その進もうとするのは何か。足ることを知らないためである。足ることを知らないというのは今の有様は愉快であってもなお不満として将来に期待する。

故に老成人も年少もともに今に満足できないが、甲はそれを嫌がって後退しようとし、乙は多くを求めて前へ進もうとする。もしも今の人間社会をこの老成人の手に委ねたら、失策は少なく丁寧扱われるが、人事は停滞不流の底へ沈むに違いない。これに反して年少だけに委ねたら、ことは活発に動くに違いないが、思いがけない粗漏失策が多くなるだろう。その得失を論じるのは本章の趣旨ではない。ただ保守と進取の働きは年齢によって異なることを述べたのである。

貧富の区別

第 4、貧富の別がある。土地を貸す商売は安全だが利益は少ない。廻船（船の運送業）は利益は大きい危険である。資本が最も少なくて

利益を得るのが大きいのは博打相場だが、これは最も危険である。大体、事をなすのに利益があれば危険もまた伴い、危険の大小に応じて利益の厚い薄いもあるので、商売、工業の企てから政治の改革等に至るまで、すべて社会で新規の事業を興すにはどれほどの見込みがあるかは鬼神でないので、確かにその安全を前もって知ることはできない。いったん失敗すれば財産をなくすだけでなく、甚だしい場合は身を犠牲にすることもあって、危険もまた大きなものと言える。

もし世の中に少しの資本もいらず、危険もなく大利益を得ることができるものがあれば、万人はすべてこれに走ることになる。しかしこれまでその例を見たことがない。故に、巨万の富をもつか、又はそうでなくても朝夕に不自由なく安楽に暮すことができる人のために考えれば、安易に事を企てないことが得策である。また、これまでの事実を見てもこうした人は常に事をなそうとする意欲が薄くて、改革進歩説に同意する者は大変少ない。確かに、利益を得ることを好まないわけではないが、元々あるものを失うことを恐れるのである。ただ、貧しくて資産がない人は、下は少民から上は学者・紳士に至るまで、事を好まない者はいない。この流儀の人は事変にあっても失うものがなく、あるいは大きなものを得る望みすら持っている。その状態はあたかも、えさを使わないで魚を釣り上げるようなものである。得られなければすぐ止めるだけである。得られれば無から有を生むようなもので、人間の快樂としてこれ以上のものはない。

この一事はこれまでの世界の例で明白なことで、特に喋々と述べるほどのものでもない。また、貧しさに加えて独身なら、ことを企てるのに最適である。妻子を思う情は、壮士（血気盛んな者）の熱血をくじく一大劇薬で、しばしばこのために屈して来た者が多かった。歴史を調べて、古来決死の士が父母と決別した者と妻子を見捨てたものを比べると、その数に大きな差があることが分かる。父母を捨てて、よその土地にいる者は多いが、妻子と別れて世間に徘徊する者は大変少ない。この一点についてみると、親子の親しみは夫婦の情の強さに及ばないことは明らかである。

故に、現在の社会に安住して古いものを保守する人は、必ず金持ちの主人で、これに反する者は貧しい独身の働き盛りの人といえる。漢の戦国の世に孟<sup>もうしやうくん</sup> 蕃<sup>ばん</sup>君（中国戦国時代の齊の皇族で、食客数千人を囲ったことで有名）、平<sup>へいげんくん</sup> 原<sup>げん</sup>君（中国戦国時代の趙の宰相で、食客数千人を囲った人で有名）に食客数千人というのは必ず

この類の働き盛りの人で、当時の社会の原動力だったのだろう。また近代フランスでも、学者論客に独身者が多く、このために自然と世論も騒がしさを増すと言われた。日本でも議論が盛んな者は住まいを定めていない書生の中に多い。この流の人は、今後も増えるとはあっても減ることはないだろう。その処置次第で国に害をなすこともあり、また大いに貢献することもある。

## 官民の違い

第5、官民の別がある。社会には貧富貴賤があり、智愚強弱があつて各々その利害が異なる。この利害が異なる人を合わせて、一つの政府で支配し、一定の法律でコントロールすることになると、その制法が一方に便利なのは他方に不便となり、こちらの種族に利益があれば他の種族に損が生じて、どちらかに多少の不平が生まれる。しかし、この不便損害を考慮して各種族の求めに応じようとする、あちこちで政治を違え、時によって法を改めざるをえなくなる。これもまた不平の原因になって、一層の騒動を引き起こすだけだから、政府たるものは到底個々の人民の意にかなうことはできないものと覚悟し、努めて政治を簡略にしてその方法を明らかにして一定不変の旨を主張する以外に方法はない。

一定不変となれば、たとえ目の前に小さな利害があつても、これをかえりみる暇がないので、情けがなく、気につけないで見過ごすわけではない。かつ、この一定の政法を実際に行うには、必ず多少の権威を要することだから、その権威の大本として腕力を用意して、安易に腕力には訴えないが、あたかも弓を引いても放たず、丁重に古いものを保守し、現在の秩序を乱さないようにして社会の安全を守ろうとするものである。

これに反して、人民は各自その利害を論じその便不便を述べて、周囲を顧みる必要がないので、部分についてこれを見ると、述べることはすべて正しいようで、訴えることに道理がある。加えて、世間に不平者は多く満足する者は少なく、得意者は黙り不平者は騒々しく、喧嘩やおしゃべりは止めどなくて、ついに天下の公の世論となって、その方向は常に新しく変動を好むものである。且つまた、権力を欲するのは人の常だから、政府の人もややもすると権力を誤って用いて人民を抑圧しようとして、抑圧が重くなれば人民の抵抗はさらに強くなって、こうして官民の間に軋轢が生じることがある。結局、官は保守に失敗し、民は進取に失敗したといえる。人柄の罪でなく勢いがそうさせたのである。

以上5か条で述べたものは、実際にそうであるなら、進取の主義にしたが

って新規変動を望む人は、都会の状態を熟知し智恵のはかりごとが盛んな人で、年が若く家が貧しい人民の中に見ることができる。政府は富裕者と老成人頼みにして田舎の愚民を見方にして保守主義を維持する。ただ論説上はこのように区別するが、実際上では例外となるものが多い。ただ人間社会の大勢を論じるとこのようになるというまでで、読者は字句にこだわって本旨を誤ってはならない。

### 第三章 蒸気船車、電信、印刷、郵便の四者は 1800 年代の発明工夫にして、社会の心情を変動する利器なり

四発明は最近のことである

昔から世に発明工夫は少なくない。天文、化学、機械学など、どれも時代に応じてその様子を改めたことはいろんな書物で知ることができる。昔は地動説、元素の発明、火器製造から、近代では種痘、ガス灯、紡績機械などはその著しいもので、その御利益もまた少なくないが、その実用性が広く、社会全体に直接に影響を及ぼし、人の肉体の禍福だけでなく内部の精神を動かし、智徳の有様を一変したものは蒸気船車、電信の発明と郵便、印刷の工夫である。

その起源を考えると、蒸気船は 1807 年、蒸気車は 1825 年、電信は 1844 年から始まり、実際に使えるようになってまだ 50 年にもならない。郵便の仕組みも英国でその体裁ができたのは 1600 年代であるが、これに大変革を加えて今のように盛大なものにしたのは 1840 年ローランド・ヒル氏の立案で、全国の距離の遠近を問わず、手紙の重さ半オンスにつき郵便税 1 ペニーと決めて以来のことである。(国内の郵便税を平均する仕組みは、昔から今までなかった新工夫で、ヒル氏がひとたびこの案を立てて以降欧米諸国でほとんどの国でこの仕方に従わない国はなかった。)

また、印刷の方法も、その由来は古くて機械の種類も少なくないが、昔からの印刷法だった平面の活字版に板を使って圧するものを変えて、円柱を使って或いは円柱に活字を植えて、或いは活字版に円柱をころがして刷るという新工夫を加えて以来、急に機関の活動が増えて、以降これに蒸気力を用い、印刷の速さは以前の百倍にもなり、こうして今日のように盛んになったものである。こうして円柱の用法は、1800 年代の初め英国のニコルソンとサクソン国のコーニフ氏の創意でできたもので、今からたった 60 年前のことに過ぎない。

新発明の大きな影響

この大発明によって世界を一変したことはいまさら喋々と述べるまでもない。電信で商用の知らせを送り、蒸気船車で貨物を輸送すれば物価も各地で平均され、たとえ投機の商売でも、昔のままの古いやり方に頼らずに済む。(近年の日本でも、奥羽や越後の米価は、東京の価格と平均し、また一昨年横浜で生糸価格が急騰したときも、その知らせは電信ですぐに地方の荷主へ伝わり、仲買商はかえって大勝利を得なかったこともその一例といえる。)

昔オランダ人が独り東インドの香料を専売したような商売は、今日では

行うことができない。小さなことで言えば、日本が鎖国時代に、大阪の商人が長崎に渡来するオランダ船一艘からあるだけの貨物を買占めて。一年間日本国中の薬品の相場を自在にしたようなことも、今では昔の物語にあるだけである。

また、蒸気船を作るのは、鉄道を敷くよりも容易なため、初めは船の利用だけが盛んだったが、近年に至ると鉄道を作ることが日に日に増えて止むことがない。もしも今後、ヨーロッパから小アジアの地方を縦横に渡り、インド、シベリアにも及んで、中国の東岸まで、数条の鉄道が通じると、世界中の商売にどのような変化が生じるだろうか。英国などはこれまでの航海の利益を失うだけでなく、本国も周囲の海に妨げられて、かえって大陸の国々と商権を争うことができなくなるかもしれない。

また、国防の点を考えると、昔の海国は海の水も防衛の要害と頼っていたが、蒸気機関の利用が自由になって以来、海岸の防衛は大変困難になり、今後鉄道が盛んになると陸を走る便利さは海を渡るものの百倍になり、それに伴って海の水もまた要害の一つになり、これを頼りにする気持ちは昔まだ蒸気船車がなかった時代の有様に戻るようになる。情勢の変化もまた著しいものがあるといえる。故に蒸気機関はただ商売の損得だけでなく、戦争の勝敗、交際の得失、政務の遅い早いなどおよそ人間の禍福はすべてこの利器を頼りにしないではいられない。うまくこれを利用すれば、今日の貧乏も明日には富豪になれる。その用法を知らない者は白昼に財産を奪われて訴えるところもなくなる。

蒸気電信は、人を貧しくし、富ませ、知恵ある者にし、愚かにし、甚だしい場合は人を生かし、殺し、国を興し、国を滅ぼすこともある。西洋人の言葉に世界の面積を狭くしたという。私は電信に蒸気を組み合わせれば、時間を短縮して多くのことを行い、人の寿命も長くすると言う。昔の人は1日に十里あるいたが、今の人は1日に三百里走る。昔の人は1月かけて文通したが今の人は1分でその消息を知ることができる。昔の人が70歳の年齢をかけて行った事業を、今の人は3年で終え、昔の人が百名の力を使ったものを今の人一人の手で行ってしまう。故に今日でも、この利器を使う者と使わない者を比較すると、その勢力権威に何百倍もの差があることが分かる。

見聞が広まると勇  
気も生まれる

「智極まりて勇生ず」という言葉があるが、私がこの言葉を解すると、智とは必ずしも物事の道理を考えて工夫する意味だけでなく、見聞を広くして物事の様子を知るという意味にとれる。英語のインフォメーションの意味にも解することもできる。人はこれまで見たこともないことはとかく気後れして進んでそれをとる気力をもたないが、偶然にこれを聞きまた目撃すると、一旦これにとりかかると次第に工夫も生まれて、気力も生じて、以外に簡単に功を奏するものが多い。遍歴する僧の話の聞いて諸国巡りを思い立ち、船乗りに出会って船に乗ることを一念発起することもある。また、田舎の人がたびたび法廷へ出入りしてそれに慣れ、臆病者が戦場で勇気を生じるのもその例である。そうすると昔の言葉を変えて、見聞を広くすると勇気も生じる、と言うこともできる。

英国の雑誌新聞の  
繁栄

こうして今、人の見聞を広くするために最も有力で働きが広いものとして印刷と郵便にまさるものはない。例えば今英国の人口はおよそ 31 百万人、全国で発行する新聞、雑誌の類が 1692 種、このうちロンドンで出版するものが 320 種、全体の中で毎日出版するものだけを数えると全国 142 種のうち、ロンドンで 18 種、最も盛んに発売されるものはデイリーテレグラムで日に 24 万部を刷り、これに次ぐものはスタンダードで日に 17 万部を発売すると言う。他は推して知るべしである。この膨大な新聞を毎日毎週毎月刷り、これを蒸気車で運搬し、朝印刷した者は夕方には全国津々浦々に至り、さらに急ぐものは電信で一瞬のうちに知らせることができる。

また雑誌、新聞のほかに、郵便書簡の往復も膨大な数である。1867 年英国で郵便物の数は新聞等を除いて書簡だけで 7 億 8 千万余で、これを人口 31 百万に比例すると、大体一人に付き 25 通の割合になる。盛んであると言える。(1874 年の記録では郵便物の数は書簡 9 億 67 百万、はがき 79 百万、新聞の類 2 億 59 百万で、合計 13 億 5 百万個という。本文 1867 年以来増加の様子を見ることができる。)

この雑誌、新聞、郵便の書簡は、人の見聞を交流させる道具で、ほぼ一国内外の変わった出来事や新説はこれを読み、語り、聞き伝えてほぼ漏れがない。その状況は国中の人の眼前に曇りのない鏡を置いて他人の言語思想を映し出すようなものである。見聞を広く持って、勇気が生まれるという言葉は、思っていたことが違わなければ英国人民が活発で進取、敢行の気力に富むのもまた偶然ではなくなる。フランス

その他の大陸の諸国でも大同小異である。あるいは英国ほど盛んでなくても、及ばないのはまだ進歩の途中でまだ至らないだけである。今日の有様で後退する者がいることは聞かない。結局その原因を尋ねると印刷郵便の新工夫で、蒸気電信がこれを助けると言える。

日本の今後の予想

我が日本でも、すでに鉄道電信はあるが、鉄道はいまだとりたてて問題にするほどでもなく、電信郵便も人民は未だにその使い方になれず、印刷なども便利が便利だが未だに盛んになったとは言えない。例えば雑誌新聞も、全国の各社を合わせて毎日の出版が何万部かもわからず、はなはだ微々たるものだが、全体の勢いは進歩しており後退することがない有様で、今後もし縦横に鉄道が敷かれて、人民も郵便電信の使い方に慣れて、活動にとって重要でその効能が大きいことが判れば、我が社会の形勢も一変するに疑いない。例えば今の雑誌、新聞、郵書なども、地方への配達が遅いため（昔に比べれば百倍も便利だが）、その便利さが少ないようだが、日本国中必ず即日に配達することになれば、今日より何倍も盛んになるだろう。

ただ文書の通報だけでなく、経済上でも捨てられている産物に価値が生じて、専売品が名声を落とし、僻地の無人の里も鉄道の停車場になると、沿道の地価もたちまち急騰することがある。昔から商船が停泊する港で問屋として利益をほしいままにした土地でも一朝にして財産を失うこともあるだろう。貧富の浮沈は平均化するだけでなく、津軽松前の婦人が薩摩に嫁ぎ、長崎の男子が函館の養子になり、昨日まで東京に仮住まいしていた者が、一夜の間に中国へ引っ越して、また翌日が北国へ往来し、午前大阪でつくった菓子が午後には東京で茶席に用いられて、今朝四国で出版した新聞が夕方には奥州で読めるなど、遠い距離も隣同士のようになって思想が互いに通じて方言や訛りまで平均化することになるだろう。

また、政治軍略でも、朝に西南戦争の戒めを聞き、何万人もの兵士が夕方に馬関（下関）を渡ることができれば、軍隊を各地に設ける必要もなくなる。あるいは今の県庁も多過ぎて不要なものになるか又はその法を改めることになろう。さらに些細なことになると、公私で勤務する者が亡くなった父母の墓参りといってその墓所が日本国中にあっても休暇は三日以上は必要とせず、各地への出張も十里詰の旅費が不都合になり、裁判の呼び出しに八里詰の日数も廃止せざるをえなくなる。大体今の日本社会の日常の言葉に、遠路だから不都合といって遠方な

場所を面倒がり、東西が遠く隔たっていたために間違いを生み、便りの方法がないために知らないなどという口実は一切許さなくなろう。日本国中遠路でなくなるためである。(思うに、数十年後は、芝居小説の本でも、父母の行方を捜して会えず、骨肉の兄弟、刎頸の友が偶然、異郷で出会い、別れて3年後に初めて対面したなどと言う馬琴流の趣向は全く用いられなくなり、作者も困るだろう。また、義太夫の文句に、江戸長崎国々へといい、西は九州薩摩方面、東は津軽蝦夷松前というのは、遠く離れた場所の想像を表わすものだが、今日では昨夜の長崎何町の出火は今朝には警視庁分署に張り出され、3日前蝦夷から出航した人が土産を持って今日には東京の家を来訪するのだから、10歳前後の子供は義太夫の文句を聞いて遠い外国の感じをもつだろう。ただ古老だけが昔を思い今を見て今の便利を指して時勢の変化を嘆くだけである。平気な者は少年で、狼狽するのは老人である。最近の文明開化は、老人の心に思うことと実際の事実の間に齟齬を生んでいると言える。)

口実を用いてはならない、ものごとを内密にすべきでない、ましてや秘め事や秘密なばかりごとをすべきでない。もしも秘密なことを本人一人の胸中に収めることができない時は、わずかに親友だけに話すべきである。仮にも昔からずさんな習慣で他人に見聞きされたら、その耳目は2, 3人でなく全国34百万の耳目と考えざるを得ない。秘密も困難だと言える。本編第2章で普段と変わったことや新説は都会で行われることが早くて、地方の田舎では遅々としていたと言ったが、蒸気電信以下の文明の利器がその勢いを増す時は都会と田舎の区別はない。国の全部が一場の都会になったようなものといわざるを得ない。

以上はただ私が想像で今後の変化を推定したもので、もともと一つ一つを数え上げて明言できないが、実際にその変化が意外と大きくて、かつその波及も意外に広いことは今からこれを保証して大きな過ちはないものである。(ゲルマンで鉄道をつくと国中に字を知る人が増えたという。鉄道と文学はもともと直接の関係はないので初めから期待したこともないが、その結果をみればこんな具合である。この類のことは他国でも少なくとも、結局、蒸気電信などの効能を事前に明らかにすることは人の知恵が及ばないことである。)

開国は単に外国人を国内へ入れたのではなく、文明の利器を国内へ入れた意義がある

そのようなわけで、この蒸気、電信、印刷、郵便の四者は開国以来、西洋諸国から輸入したもので、開国がなければ我々は今日に至るまでこうした利器があることを知らなかっただろう。世の人々は嘉永年間に西洋人が日本へ入ってきたことで一大變動だと言ってむやみに驚くようだが、私はその渡来だけを驚く者ではない。どうしてかというと、その西洋人なる者は、蒸気、電信の発明前の西洋人で、彼らと条約を

結ぶことは深く心配する必要もない。たとえ彼らと交わっても、ただ閉ざした国を開いて双方で交際関係が生じるだけのことで、昔のままの海防を厳格にして通信貿易すべきだけである。もしもその交際が我々に不便利ならば、拒絶することもできる。現に寛永年間に外国人を追い払って、向こうもまた甘んじてわが国を去ったではないか。寛永以降、かの国の人は日々事業を勉強して、我々は太平に慣れて怠けていたこともあるが、文化年間に至るまで、向こうから我々に対して活発な働きを示してこなかったのは、ロシア人が蝦夷地で乱暴を企て、その跡形もないことを見ても分かる。

昔のままの西洋人ならば、我々も昔のままでそれに応じて、少しも恐れる必要もないが、嘉永年間に初めてアメリカ人が我が国へ来て通商の道を開いたのはどういうことか。私が見るところでは、その働きは米国人の働きでなくて、蒸気の働きと思わざるを得ない。我々はすでに蒸気の働きにより国を開き、開国の始めからその効能を知り、その蒸気、電信等を自分の国へ入れたのである。だからこの国の開国は、単に外国人を入れたのではなく、外国で発明工夫した社会活動の利器を入れたのである。すでに利器を取り入れてそれを用いる時は、わが開国の一挙はただ外国と日本が相對する関係に変わっただけでなく、国中で變動が生まれざるを得なかった。結局、この社会は、これからもこの利器とともに動いて進むものと見なければならぬ。

#### 第四章 この利器を利用して勢力を得るの大なるものは進取の人にあり。プロシア及びその他の例を見て知るべし

蒸気、電信、郵便、印刷の利器は前章で記して、この利器をもっと巧みに用いれば、権力を得ることもますます大きくなるという次第を述べた。したがってこれを利用する者は保守者流か改新者流かと聞くと、その働きにより甲を利する効用は乙を利する効用に及ばない。もともと政府は、その性質上やむをえない事情により保守主義に従っても、本来社会の中で智力が乏しくない部分だから、これを利用しないわけではない。これを用いて活動する者も多いが、結局、この利器の性質を詳しく見れば、止まって守る人のためには大きな効用はなく、動いて進む人のためにとっても便利と言わざるを得ない。

政府の対応

今世界中の政府で、日々文明に進むことを好まないものはない。仮にも、世の中に新しく便利な工夫があれば、きっとそれを採用して捨ててはいけないと望むが、第2章第5条に述べたように、政府の最大の職分は現在の秩序を保護することにあるので、そのときには自然と丁重な風があり、世の中で進歩が早く進む間にも、独り官職から辞し身を慎む情がないわけではない。たとえて、政府も人民も、その文明に進む有様は、順風に帆を上げて走る船のようだが、政府の船は走行の際に、船中の事情を見てまた外物との関係を心配するため時々港へも停泊して、或いはことさらに行程の緩急を行い、甚だしいときは順風を見送って進まないこともある。

人民の対応

これに反して人民急進の船は、ただ一方に進んで前後を振り返ることがないので、政府の船と比較すると、自然と緩急の差はなくなる。普通の順風でもそうである。それなのに今、蒸気、電信、印刷などはこの順風の最も激しいもので、その風の勢いを利用する者は、直行急進の人民にあるべきである事は明らかである。こうして人民の方がこの便利を得て、実績はどうかと言うと、今の世界諸国では必ず官民の間に不和が生じることが多数ある。例えばここに名声人望が高い学士論客が一冊の雑誌を発行し、一場の演説会を開いて新説を唱えんとすると、その説はたちまち社会の全体に広まって同時に人心を動かし、熱心にすぐその方向へ進もうとするのが人民の普通の状態だが、政府では急にそれと一緒に進むことはできない。これもまた自然なことで、官民の地位が異なるためである。

それなのに 1700 年代の思想伝達の利器（すなわち蒸気、電信、郵便、印刷）はまだ十分に便利になっていない時代だったので、たとえ民間にどんな新説名案があっても、その広がりやゆっくりだったため、政府はその緩慢な時間を利用して少しずつ計略を行っていたが、今日の勢いでは人民の心情は、かの利器を使ってすぐに進退の勢いを盛んにし、心も情の動きも滔々と流れて、他の少しずつ計略をなすものを許さない。官民の軋轢は一層甚だしくならざるを得ない。

文明開化では人民の騒動が増え、政府は専制を強める

文明開化も次第に進歩すると、人々がみんな道理に頼り社会は次第に静かになるという説は、ややもすると学者の口ぶりから聞くが、きっと漠然とした妄想で何の証拠もない。今のものごとの進歩を見て本当にこれが文明開化だとすると、それが進歩するに従って社会の騒動はかえってますます激しくなるはずである。人民はまっすぐに寄り道することなく文明の利器を得て、その勢いに乗じて振り返って政府の有様をのぞくと、その緩慢さを見るに堪えず、それを軽蔑せざるを得ない。（例えば日本で、今日でもなお、旧幕時代の例に倣って、慣例は文筆に長じた人のお家流で書かれて、大目付の布令が田舎に着くのは発令の半年も過ぎて、険しい山川は砦と称して、わざと通行を難渋にして通行を遅くさせ、人民の呼出しには出頭命令が届いたら名主付き添いで参上して、些細なことに恭しく終日を費やすことなどがあれば、人民はその処置を見てその緩慢で不便なことをみんな笑う。今後とも、鉄道建設などが次第に盛んになって、人の動きも活発になると、今の政府の処置も必ず一層耐えがたく思う。50 里の道を 2 時間で走って裁判所へ出頭し、そこで黙って座って呼び出しを待つために 3 時間費やすことがあれば、耐えがたい。日本国中を一周するのにわずかに 3、5 日なのに、旅行の願書には区戸長の印から地方庁へ渡り 10 余日かかって初めて承認となると、これもまた耐えられない。学者は自らこうしたことを想像すべきである。）

これを軽蔑し、愚弄して、またこれを敵視し一気にこれを改めようとする勢いは、あたかも人民が政府を押しえつけるようだが、政府はこの圧政に堪えられずにかえって大いに抵抗せざるを得ない。その抵抗の方法は、ただ専制抑圧の一手段があるだけである。これを執政者の英断という。以前フランスでナポレオン 3 世が在世の時代の政略、近年ではロシア、ゲルマンの国政を見ても、その政略は次第に専制に赴くようである。今その原因を調べると、人民が急に見聞を広めて、心情や思想の運動が一気に強くなったことにほかならない。あるいは 1800 年代に蒸気、電信などの発明以降の文明開化によって、政府の専制を促したともいえる。そうであっても、その専制なるものは、果たしてうまくその効能を発揮して人民の運動を抑えることができるか。一大疑問だが、私ははっきり

否と言わざるを得ない。どうしてかという、政府の専制は一定の昔からの古い形式で、人民の進歩には無限の新工夫があるからである。

文明開化で人民は  
芋虫から蝶になる

たとえば官の専制の力を強くする方法は、視察を頻繁にして禁制の法令を厳しくし、労働組合の演説の分野を限るなどの手段だが、この手段はいずれも陳腐で、あるいは今日は直接的な効果はあるが後日間接的な効果がないだけでなく、たとえいかに強大な政府でもその専制はすぐに蒸気、電信、印刷、郵便の力に敵となるものだから、これに敵対して直接的な即効もないことになる。今の世界の政府たるものは、単に人民に対するのでなくて、蒸気以下の利器に当たるものと覚悟せざるを得ない。試みに、かの蝶々を見よ。芋虫の時はこれを支配するのはとてもたやすい。指でつまめるし、箸で挟むこともできる。あるいはその醜さを憎むならば足で殺すこともできるが、一旦蝶になると、あちこちに飛びまわって再び人の手にかからず、花にたわむれ枝に舞い、意気揚々としてあたかも俗世間の人物を軽蔑、愚弄するようだが、羽ができるとどうすることもできず、指でつまむことも箸で挟むこともできない。

今、改進黨の人民が、思想伝達の利器を得たのは、人体に急に羽が生えたものと異ならない。1700年代の人民は芋虫で、1800年代の人は蝶である。芋虫を支配する制度習慣で蝶を支配しようとするのは難しい。故に、今の世界の諸政府が次第に専制に向かうのは、自然とやむを得ない事情だが、到底うまくいく望みはあり得ない。

人事がお互いに抵抗しあうのは、機械学の道理と同じで、甲の力が百で乙を犯すと、乙もまた百の力でこれに応じるのが法則である。手で人の頭を打つのは、頭で手を打つことに等しい。これを打つ激しきは、打たれる側の激しきである。故に政府でも人民でもその勢力が次第に盛んになり、一方を抑えることが次第に激しくなると、一方からこれに応じる働きも、次第に激しくならざるを得ない。

ニコライ帝による  
ロシアの専制

1870年英国刊行エカルド氏著作の「ロシア近世史」を見ると、ロシアの文明開化は、ピョートル大帝以来、未だに内地に及ばず、単に西方諸国に面する部分だけが西洋文明の風に変わり、内地では依然として昔からの専制で人民を支配し、大きな風雨もないが、1825年から1855年までニコライ帝が在位の間にはにわかに専制の勢力を増して、1848年から1854年の間に、新法をたててゲルマン、フランス、イギリスの良書を読むことを禁止して、雑誌新聞を見ることを禁じて、国帝の許可を得て、五百ルーブルのお金を払う者でなければ外国へ行くことを禁じて、外国

の技術者及び学生が来て国内の僻地へ入るのを禁じて、また国中の大学の生徒は各校三百名以上の入校を禁じて、有名な論説及び学校読本を読むことを禁じて、理論学を教え、普通法律を講じる業務を禁じ、すべての学校の生徒は兵学校の生徒とみなして、通常の學術技芸は皇帝が好まないもの云々とあるのは、未曾有の専制と言える。

そのようなわけで、この皇帝は天性、豪気、正直、質朴な君主で、たとえその専制が帝国遺伝の風でも、心情の強さ優しさに至ると、ピョートル大帝と比べても、大きな違いの証はない。それなのに大帝は、しきりに西方の都に近い国（英仏ゲルマン等の国をいう）の文明にあこがれ、それを採用し、その学士を招いて、自国の人を無理やり外国を歴訪させるなど、当時の痕跡を見ると、都の日々新しい文化を敬い慕って、捨てておかなかった。ニコライ帝に至ると、まったくそれに反して、文明を敵のように見なしたのはどういうことか。きっと偶然ではなく、保守と進取の両方が互いにつき動かしたものである。1600年代のピョートル大帝は人民を進取に導いた人で、1800年代のニコライ大帝は人民の進取に困り果てた人である。人事は自然の勢いだ、その心の動き次第で結末がどうなるかはわからない。以下に同書の大意を訳して当時の形勢を示す。

エルカドの「ロシア近世史」

前略、この時期にモスクワ、ペテルスブルグの書生たちはやっと都の新説を聞き知りこれを喜び、30年来英仏ゲルマンで発行された新版のいろんな書物を購入して、秘かに読んで、中でもホブス、フォグト、ボックル、ダーウイン、ベンサム、リュージ、スチュアート・ミル、ロイスブランクなど大家の明快なすぐれた見識に出会って大いに感動した。

この世の人間社会はロシアのみと思ひ、政府もただロシア政府のみと思っていたが、思いがけず、国境一帯の山を越えて小さな川を渡れば、文明の別世界が開いて、別に政府があり、人民がいる。しかもその人民は固有の権利なるものをもって、人事の秩序も自然と乱れないものがあるとは、また、珍しいことだった。単に珍しいと言うだけでなく、美しいものだった。彼も人なり、我も人なり。我々はその美を倣おうとして、その状況はあたかも夜明けの鐘が夢を破るようだった。春の嵐が冬眠を開くようで、再び小虫として古い天地で生息してはならず、世の中の物議が次第に盛り上がりとする際に、1855年ニコライ帝が没して今のアレキサンドル二世が立った。

これより先にモスクワの学士にヘルズンという者がいた。この町の書生党の首領で、ロシア社会党の元祖である。この学士がかって政治のことについて些細な得失を話したために、先帝が忌み嫌うことに触れて、罪となり禁錮にさせられたが、事に託してイタリアへ行き、遂にイギリスロンドンへ行って未だ帰国しない。同地で出版ということを知りて毎週雑誌を発行して、その名もコロルと名付けた。コロルはロシア語の半鐘の意味で、きっと人民に警告する意味だろう。

新帝即位の初めに一編の論説をコロルに書いたその文体は、ニコライの相続人たるアレキサンドル帝に送る手紙で、これまでの諸帝の処置を厳しく非難し、独裁政治をほしいままにして下の万民を苦しめ、時勢に逆らって人民の自由の重要な意義を妨害したのはつまるところこれまでの帝の罪だから、その相続人たる今の帝は、その罪を償わなければならない。その贖罪のためにと行って様々な望みを述べて、とりわけ奴隷の法をすぐに廃すべきとして、恐れ憚ることなく公然とロシア専制の治風を攻撃したのである。

この一編の雑誌が世に出てからは、何日もたたないうちからヘルズンの名声はヨーロッパ全土にとどろき、身分の高いものも低いものも人民は争ってコロルを購入し、学者や紳士がこれを喜んだだけでなく、仮に文字を知るものなら伝え伝えてその名を書かないものがないほどであった。他国においてすらこんな具合であり、本国の様子は考えてみればすぐ分かる。幾千万の人民ははじめて政治の自由というテーマを聞いて、これに驚き、喜び、賞賛し、心を奪われて、ほかの事を考えない。雑誌中にかかれたことに少しの疑いも入れず、あたかも命令に従う者のようで、今日記者の言葉により人心が左右される有様は、昔ニコライ帝が政権を取って全国を感服させた勢いと同じである。

ロシア政府では、厳しくこの雑誌の輸入販売を禁じて、ヘルズンの名を書くことも許さず、ひどいのは計略を設けてヘルズンなる者はすでに死亡してこの世にいないとまで述べたこともあったが、全然人心の運動を止めることはできず、全国至る所でコロルを見ないところがなかった。ノウゴロット市では一挙に 10 万部を没収したこともあった。ほかは考えてみればすぐ分かる。まさしくこの本は海上を経て入ったのではなく、アジアの陸地を経て入ったものという。また、この

雑誌には通信する者がとても多くて、ロシアの全国から中心の首都に至るまで、政治上の事情は一つとして発行元の本局へ連絡がなかったものはなかった。政権が極めて秘密にして重要な大臣数名以外に漏れるはずがないものも、コロコルの本局ではいち早くこれを探し当てて、公然と紙上に書いて、政府を驚かすことも少なくなかった。

#### ロシアの自由論

コロコルの一挙は、ロシアの長い夜の眠りを破って、人民は狂ったように、目が眩んだようになり、有志者と称するものは皆ほかの事をやめて雑誌、新聞の発行を試み、1858年から1860年の間に、新たに局を開いて出版したものが77種、そのうち50はペテルスブルグ、15はモスクワ、その他10種は他の都市であった。各社はお互いに盛大を競い、自由主義の論鋒を競い、そのために記者を雇うのにお金を惜しまなかった。ペテルスブルグの富豪ペスポロトコ氏は、毎週雑誌の原稿1枚に二百ルーブルで名文を募集し、モスクワの学士カトコフ氏は月刊誌の出版局を買うために私立学校を廃止したと言う。

また、政府出版局へ仕官する者も少なくなかった。正に一般の人心が自由を唱える時代だったから、また自由によって名誉を得ようとする人情から、検査局へ仕官し出版の免許を寛大にすれば、自然とその時代流行の品性として政府を恐れない名前を得られたからである。ゆえに、以前は人々は皆この局の責任に当たることを恐れて仕官を避けた者も、今日ではかえってこれを喜び、財産がある平民、または扶助の年金を得ていて役職がないものは皆これを希望した。これもまた一事の男気風に出たものだろう。或いは出版検査に際して自由寛大が過ぎて免職し資産がない者がいると、斡旋人が協議して、これを補助する風もあって、モスクワのクローズ氏などはこの補助を受けてかえって富を得たという。

ロシアの自由説は、ほとんど一時の流行病のようで、その勢力が次第に延び広がって、政府でもこれをどうしようもなくなった。ついに1861年2月に至り、奴隸法を廃止したが、この一挙で人心を沈静化できず、まさしく数百年来の旧慣を一時に変革したので、奴隸の主人は言うまでもなく解放された奴隸も、急に放たれた籠の鳥のようで、方向に迷って行く場所が分からず、籠を出た自由は籠を奪われた苦勞を償うためには不足だった。

また一方には、これより先に、首都とモスクワ周辺で、書生たちは多

分本を読まずにただ雑誌新聞の論説だけを読んで喜び、したり顔で政治を論じ国事を議論し、或いはあちこちで集会をして或いは政府に建議し、その騒がしさには耐えられなかった。そこで、1861年5月文部卿プーチャーチン（旧海軍将校で、近頃日本から帰って文部卿に転任した人）の立案で新法をつくり、大学の謝金を値上げし、半年ごとに50ルーブルと定めて、これにより入校の道を塞いで、また生徒たちが私的に結社を作って同校の貧しい学生を救済するための拠出金を出すことを禁止し、その拠出金を処分するための委員を選ぶことを禁止するなど、様々に不自由な新法を作って、学者世界の物議を鎮圧しようと試みたが、わずか半年後にまた書生の騒動を引き起こし、ついに数名の生徒を牢獄へ入れただけで、文部卿の策も効果がなかった。

#### ヘルズンの社会党

事態の困難さがこんな状態のときに、モスクワに一人の学士がいた。名前はカトコフという。この人は長い年月英国の政治を支持し、立憲政体の説をしきりに賞賛して少し世に知られた人だったが、1862年夏頃、政府の内命を受けて雑誌を発行し、その中で公然と筆を振るってヘルズンの説に反論し、その過激さは罪でありその偏りを咎めて、主婦の騒動を作り出し国の平穩を害したのはその亡命記者であると言って、誰に遠慮することもなく論破攻撃したが、世の中の人も初めは珍しそうにこれを読んだが、しばらくしてその論に納得してコロコルの名もやや衰退に傾きかけた時に、1866年4月4日、モスクワの書生カラコソフなる者が短銃で国帝を狙撃して成功せず、すぐに逮捕されて取り調べると、この人は貴族でもなくまたポーランド人でもなく、ロシアの転覆者流の社会党の一人だった。

そもそも社会党は、近年モスクワに出現したもので、ゲルマンやポーランドの人はこれに関係していない。その主義はもとはフランスから伝わりあのコロコルの記者ヘルズンが首領で、純粋な党派は多くない。ただ政府に向かって突き動かすだけで、1863年ロシア政府の乱暴な勢いでポーランドの反対派を押しえつけて以来、この党はその処置を快く思わず、心に思うことを変えて他の自由党の中に混ざり、その説に、ロシアの農産平均の説によりまずこれをポーランドで実施すればついには地主廃絶も実際にできるだろうと言ってひたすらその一点に論鋒を向けたが、党内の過激派はその考えが古い習慣にかたまってぐずぐずしていることを快く思わず、別に党を作って、その説は人間社会の在来の秩序をすべて転覆し廃絶することを主義とし、私有をなくし、国をなくし、寺院をなくして、婚姻法をなくすなど、一切万事人為の

旧物を一掃しようとするのが希望で、その大望のために、まず国の帝王を抹殺してこれをなくし、それを他に影響させようとする者である。

そういう類いの党は少なくないが、極めて荒々しいもので、これをニヒリストの党という。ニヒリストとは虚無の意味である。世の中のいかなるものも受け入れず、前からあったものをひっくり返し、無くして愉快になる者たちである。だからこの虚無党と自由党の性質を調べると、もともと天地の差があるが、その所見は自然と符合し合う点もないわけではない。貴族を尊んで人の種族を分けることを憎み、または各人ごとに財産を分けて私有することを憎むなどの点は、自由党が常に主張するもので、虚無党もこのために力を得たことが多い。

ロシア政府の専制

こうした事情だから、政府は國中一切の自由党を排除してこれを政敵と見なし、これを鎮圧するために保守専制主義に力を尽くすことになった。その時、シュワロフ公を警察長官とし、悪者カラコソフ及びその党の類の取り調べはムラビヨウ公に任せて、第一番に時の文部卿ゴロフニンを罷免して、警察長官の親友ホルストイをこれに代えた。その趣意は前の文部卿の在職中に普通学及び物理学を奨励して学者に役立ち、社会党や虚無党をはびこらせた罪によるものだった。

その他の大臣の任免もあって政府は全く保守主義の政府になり、さらに翌月（兇徒暴動の翌月で1866年5月）、国帝が命令を下して、おおむね近年の社会党の陰謀で国民の権利、私有および宗教に危害を加えようとする企てが戦犯逮捕した兇徒の暴動によって、事柄は明白となり、その罪を憎むべきで、本当にわが政府の広い思いやりの度量の大きさ、自主自由の旨を誤解したものである。今後国帝はますます人民の権利私有を重んじ、国内の貴族を保護して旧物を守ることができれば、もしもこの趣旨に反して騒動を起こす者がいたら、直ちにこれを殲滅して許される云々といつて、次いでモスクワ出版の新聞を停刊または廃止して、すぐにこれを殲滅して許さない云々といつて、次いでモスクワ出版の新聞を停刊又は廃止して、雑誌はただカタコフ出版のものだけを（コロコルの反対説）盛んにして、政府の政略は1860年に至った。

自由論も利器ができるまでは広がらず知られてなかった

以上はロシアの近世史中1870年までの大略である。その人心騒乱のきっかけは、ニコライ帝在位の時に始まり、以降人民の勢力と政府勢力が相互に衝突し軋轢を生じて伸びたり縮んだりして、それが収まるどころが分からなかった。1870年以降も同様の形勢で、政府の思い通

りにならず、また人民も思い通りにならず、衝突はますます激しくなり、今年4月にも国帝に狙撃を謀った者がいたという。その国情は考えてみればすぐ分かる。人民も政府もともに慌てふためいて進むべき方向を迷っているものようである。

自由論も利器が  
できるまでは広  
がらず知られて  
なかった

そもそも人民自由の説は、その由来は最も古くアメリカ建国も元はこの説の結果で、すでに百余年が過ぎている。だから世界中で自由論を唱える者は、その年月も長く、人物も多く、従って著書も少なからずあって、地球上のある部分ではすでに陳腐なことに属している地方もあろうが、残念ながら、1800年代の初めまでは、この説を伝達する方法が少なく、世界中の多数の市民はこれを知らなかった。それなのに、3、40年来蒸気、電信、印刷、郵便の技術がにわかに進歩し、人民の往来が容易になって、物品の輸送も便利になり、印刷が早くその配布も広まったのは、あたかも世界中に思想伝達の大道を開いたもので、例えると、学者論客の思想論説は、土地で生産される物品のように蒸気電信等の利器はこれを運送する船車のようなものである。地方でどんな名産があっても運送の船車を使わなければ、世の中でこれを知り用いる人はいない。学者の新説も伝達の利器がなければ、広く人心を奮い立たせることはできない。

近年英仏その他の国々で、大家先生も少なくなく世界中で新説を快く受け入れる者がとても多くなっているが、もしもこの大家に1700年代よりも以前に戻し、それ以降この利器の発明工夫がなければ、新説の勢力も今日のようにはならなかったことは智者を待つまでもなく明らかである。例えば、1770年代アメリカのトーマス・ペーンの本などは、自由論が最も盛んなものだが、当時その本国の人心を奮い起さただけで、世界の他の部分には及ばなかったのはどうしてか。その時代にその説を伝達し広げる利器がなかったためだけである。もともと、人民たる者が、その権利を主張し、自由の味を知るには多少の智徳も必要なため、かつその国々の習慣もあり、教育の度もあり、また貧富の差もあって、必ずしも他の説さえ聞けば、すぐに振るうべきではないが、その地方全般の事情により、人民の地位はすでに上達し、進んで文明をとり、勇んで自由論に落ち着く有様で、それでもためらい無言でいるのは、きっと新説を広げる方法が乏しくて地方の人民の見聞が狭いためといわざるを得ない。

今、ロシアの人民などは、ピョートル大帝以来、衣食も次第に足りる

利器の進歩で人民も政府も狼狽し狙撃暗殺などの暴挙が増えた

ようになり、教育も進んで、人民が進んで行く資本もまさに熟した時期になって、その騒動もまた偶然ではない。1800年代にはじめてそうなる原因があつて、内外の事情があつてそうなるものと言える。

自由進取の議論が蔓延するために、官民ともに狼狽してその方向に迷うのは、独りロシアのみではない。ゲルマンその他の君主政治の遺風に従つて、人民を統制しようとする国々は、どこでもみんなこの困難を感じる。その政府たる者が、自由論に従おうとしても、論者の望みは過大で事実がそれに従うことができない。さりとて、まったくこれを排除するには、論者の勢力もまた弱小である。これに従うように、またこれを排除するように、曖昧なまま日一日を費やし、ひどいのは国内の不和を癒す方便として、ことさらに外国との戦争を企てて、それによって一時の人心をごまかす奇計をめぐらす者がいる。フランスのナポレオン三世がそれである。

それなのに、本章のはじめに述べたとおり、人民は近年の利器を得て、羽もできて、政府に激しく怒るのがいよいよ甚だしくなるために、政府もまた、時として大いに圧力を使い、そのために双方に激しい揺れ動きが生じて、その勢いは前代比べて何倍もの残酷さとなり、あるいは狙撃暗殺などの暴挙に至ることがある。フランスのナポレオン三世が在世の時及び今のゲルマンなどの事変を見ればこれがわかる。(フランスの帝王、ゲルマンの帝王、ビスマルク宰相等がたびたび暗殺に巻き込まれようとしたことは新聞で見ることができる。) 文明と称する今日の世界だから、これらの暴挙は次第になくなるはずで、1800年代には極めて不似合なことだが、前の代に稀でかえって今の時代に多い。しかも3, 40年来、欧州の文明は面目を改めたと称するまさにその時期に、特に人心が穏やかでないのはどういうことか。不思議だが、決して不可思議ではない。

まさに今の世界の人々は、常に情と理の間をさまよつて落ち着くところが分からない。要するに、細かなことは道理により、大事なことは情によって出来上がっている風だから、その情の波に乗せられて、非常の挙動に及ぶのもまたどうしようもないことである。ただ人が道理を深く考える資質がないことを悲しむだけである。そのようなわけで、その情の海が波をあげているものを調べると、1800年代に発明工夫した蒸気船車、電信、印刷、郵便の利器といわざるを得ない。

1800年代、西洋のいわゆる近代文明の時代を境にして、それ以前には

暗殺の暴挙も稀で、それ以降盛んになったのは西洋史を見ると明らかである。また日本でも古来暗殺謀殺は少なくなかったが、多くは主君や父の仇を復讐するためか主人への忠義のためか又は敗軍のうっ憤を晴らすためか。私的な恨みのためかいずれも近くに直接的な原因があるものにほかならなかった。

それなのに今から 20 年前、江戸の桜田門で徳川幕府の大老・井伊公を暗殺して以来、幕府の末年に至るまで、また引き続き維新の後も、政府の要職の人を暗殺し、また暗殺しようとしたのはこれまで数回に及ぶ。その趣意はたいてい私的な恨みでなく、また復讐でもなく、ただ政治上に不平を抱いて、その熱に狂った者のようである。たとえ他に原因があるにしても、暗殺者の口実はず政治上的のことを言わない者はいない。この流の凶暴な者は、幕政 250 年間に、極めてまれでほとんど聞いたことがない。29 年を境にしてそれ以降頻りに現れるのはどうしてか。20 年はわが国が開港して近年の文明を輸入が始まった年月である。文明の大変動により人民が狼狽したものといわざるを得ない。

## 第 5 章 今世において国安を維持するの法は平穩の間に政權を授受するにあり。英国およびその他の国の治風を見て知るべし

官民の衝突を英は  
うまく回避した

これまでこまごまと述べたように、政府と人民が到底両立できないもので、文明の進歩に従ってますます官民の衝突が増え、双方互いに相手を滅ぼさなければ、あたかも結末が見られないようである。欧州各国の形勢もまた困難といえる。それなのにこの困難の最中にあたり、政治の別世界を開き、うまく時勢に適合して国の安泰を維持できるものは果たしてどこにあるかと調べると、英国の治風がそれであると答えざるを得ない。そもそも英国政治の良否がどうかについては、世の中に著書訳書も多く、人が広く知っていることだから、ここで喋々と述べるまでもない。数百年來この治風により、一国の繁栄を助けたのだからもともと良い制度と言える。その結果はとても美しいが、私が特にイギリス政治を美しいとして賞賛する点は、これまでの結果でなく、今と将来にわたり正に人の世の人倫の秩序にふさわしくもどることがない機知にある。

英国に政治党派が二つある。一つを旧守、一つを改進黨と呼び、常に対立して互いに相容れないようにみえるが、旧守は必ずしも頑迷でなく、改進黨も必ずしも粗暴でなくて、ただ昔からの遺風で、人民の中に自然と所見が違ふものがいて、双方に分かれるだけである。この人民の中から人物を選挙して、国事を語り合う。これを国会という。(人民により選挙されるものは下院に集まる。上院の議員は人民の選挙でなく、ほとんど權威もなく、英国の国家の権力は下院にあるといえる)。ゆえに国会は両方の政党の名代人が会う場所で、一つの案件ごとに議論があつて、たいてい所見が異なり、これを決めるには多数決によって行ふ。

政權が交代して国  
の安定を維持する

内閣の諸大臣ももともと両派のどちらかに属しているのはもちろんで、ことに政權を持つ最高位の者は、必ず一つの派の首領で、その党派の議論が権力を握れば、その首領は政府の全權を握り、その党派の人物も重要な地位を占め、国会の多数の人々とともに国事を議決し、施行することに支障はない。政府に地位を占めるが、国会議員の席を離脱しないので、政府では官員で、国会では議員で、あたかも行政と議會を兼ねた姿だから、自然と勢力も盛んで事をなすのが容易である。

しかし歳月を経るに従い、人気の方向を改め、政權党の論に味方するものが減少して、もう一方の党が権力を増して、その内容が常に多数を占

めると、それが人心の向かうところと言って、政府改革の投票（ウオート・オブ・ケレジート）により、首相以下全員が政府の要職を去り、他の党派に譲り、退いてもどのように普通の議員になる。政府の地位を去ったと言ってもその言論をふさぐのではない。前の政権は今の国会中は一党派の首領で、国事に注意を払って議論するときは、在職のときと異なる。ただ全権を持って施行することができないだけである。政権の授受は平穩でその機知は滑らかと言える。

また、両党が分かれて、旧守と改進黨と名を違えて、名義だけで見ると、水火が敵同士になるように、互いに政権を得るに伴って全国の機関がたちまち一変すると思われるが、実際は決してそうならない。前に述べたように、旧守必ずしも頑迷でなく、改進黨も必ずしも粗暴でなく、等しく英国文明の中の人民で全体の方向が違うわけではない。それが互いに反対になって争う点は、まことに些細なことだけである。これを衣服にたとえると、旧守も改進黨も服が長袖か短袖かは、もともと同じだが、服装の流行が違ふものようである。今のロシアで、王室と虚無党が敵対し、昔我が日本で攘夷家と開国家が相容れないようなものでなかった。学者はこれを誤解してはならない。

しかしながら、すでに両党が分かれて政権を争い。互いに新陳交代すると、その交代の時は、旧政府を排して新政府を開くもので、これを政府転覆と名付けざるを得ない。ゆえに英国の政府は、数年の間に必ず転覆するものといってもよい。ただ兵力を用いないだけである。機転が滑らかと言うのはこの意味である。

英国の治風

以上のとおり、政府の改革、諸大臣の新陳交代は全て国会の議論の動向に負かされ、国会では大臣もまた議員になって参加し、真に全国人民の意見を発表する公の場と認められるので、この公の会議の決議で政府の地位を去っても、その人の体面を損なうものではない。たとえ不平を抱いても、それを訴える理由はない。また、旧政府に代わって新政府を開いても、それが存続するかどうかは、自分自身の力だけでなく他に任されたことだから、大げさにこれを榮譽とするほどのものではない。一進一退し、それが続く期間が5年以上続くのはまれで、平均3, 4年に過ぎない。不平も3, 4年、得意も3, 4年なのである。榮譽や恥辱の気持ちは自然と淡泊になって、心に余裕を持つことができる。

ゆえに国中でどんなに新説激論を唱えても、これを抑えとどめる人はい

ない。これを唱え、論じ、広めて、その結果うまく全国の人心を取り込めば政府はそれに席を譲るべきとなる。要するに、英の政府は、その時期に一定の論があるが、永世不変に一定ものがあるわけではない。ある政党が権力を得て政府の地位を占めると、その間はその党の論を大事にして容易に動くことがない。だから一定の論となる。しかし人心の方向は、時勢の変遷に応じて、政府を改めれば最初の一定の論もまた通用できなくなる。永久不変ではないということである。

田舎に簡単な水車がある。車輪軸から T 字型に両腕を出し、腕の先に水槽をつけて、流水が樋から落ちるのを受けて、その水槽が一杯になれば、廻って他の一つが現れ、一槽また一槽、満タンになると落ちて、落ちればまた上る。その機敏さはとても奇妙である。もしこの水車の軸を持って回転を止めて、片方の一槽だけに水を受けて、その圧力に抵抗させたら、幾日も立たないうちに腕木が折れるだけである。英の政府もこの水車のようなもので、1800 年代文明の進歩にあい、よくその圧力に耐えて、これまで政治の仕組みが揺れなかったのは、政党の両派が一進一退するその機転の優れたものといわざるを得ない。

英国のみならず、オランダ、スイスなど今日うまく国が平安に治まって文明に進むものは、その治風が必ず英国政治に類するものがある。ロシアなどは政治の車軸に巨大な水槽をつけて滝の圧力にも抵抗する勢いで、励み戦うが、到底その滝のもとを塞ぐ技術はない。或いは政府の人も、今の政略が得策としているわけではないが、残念ながら、一大帝国全体の有様を左右あちこちを見れば決して自由の風に従うこともできない。つまるところ、その暴政はやむを得ず出てきた策で、一時的な間に合わせの中で思い切っているものとも言える。当事者の苦心を見ることができる。

アジアでは文明が遅れているため逆に安定している

アジア大陸の中央を見ると、国内は無事でうまく社会秩序を維持するところもあるが、そうなる理由は、ほかでもなく人民の見聞が狭く、未だに文明を知らないためである。試しに、今後中国の国内に鉄道や電信船を架けて、印刷機械を採用して郵便を施行したら、あの人民もまた決して黙っていなくなり、きっと社会に大きな変動を起こすだろう事は、智者を待たずとも明らかである。満州出身の清の執政者は、これを知っていて文明を拒むか或いは知らずに偶然これを嫌うものか、いずれにしても 1800 年代の文明を国へ入れて、旧政府の風を維持しようとするなどと言うことは万が一にも望むべきことではない。我が日本の徳川政府は

そのために倒れたのである。満清政府もどうして独りそれに抵抗できようか。文明を入れなければ、外国の侵略を受けて国が滅び、文明を受け入れれば人民が権力を得て政府の旧物を転覆する。二者のうちその一つを逃れることはできない。後世の子孫できっとこれを目撃するものがあるだろう。

## 英王室の尊厳

以上述べたところから従えば、英国の政府を改革するのも、諸大臣を交代するのもその権力は全て人民に属し、国王はいてもいないようなもので、これをさげすんで省みる者もない、と尋ねると、決してそうではない。王室を尊崇するのは英国の一種の風で、たとえどんな自由党の激論家でも、公然と王室の尊厳を攻撃する者はいない。ただ公然としてだけでなく、本心の私心でもそうなるようである。まさしく、英人の気性は、古風を基にして進取の用を盛んにしている者といえる。或いはその度量は寛大でよくものを受け入れる人とも言える。かのフランスその他の人々が、自由の改革と言うとすぐ国王を目的に攻撃し、王室回復と言うとすぐに人民の自由を妨害するようなものとは比べものにならない。

もともと、人を支配する方法には、習慣により緩やかさと厳しさの別がある。試みに、下層社会の家族を見よ。その師弟たる者はとても頑強で容易に年配者の命令に従わない。その交際も常に粗暴な言葉を使い、ひどいのは腕力で脅迫し、父母であっても自分からわが子を叩く者が多い。上級階層の家族の師弟が父母の顔色を窺って、危ぶみ恐れるものに比べて甚だしい違いがある。そうなる理由は何か。ただ家風の習慣で、上級階層の親子はお互いに受け入れてゆとりがあり、親しみ合って他人を侵害しない。今英国の王室と人民の間には、あたかもこの上等家族のようで、これまで互いに侵害した挙動がないだけでなく、中心に侵害することを忘れた者がいる。侵害しない国王はますます尊く、侵害しない国民はますます親しみ合って、こうして社会の秩序を維持するのは人間最大のほめるべきことと言える。

文明はなんとといっても大海のようだ、大海はうまく小さな川も大河も清濁も受け入れてその持ち前の色を変えることもない。文明は君主を受け入れ、貴族を受け入れ、貧しい人を受け入れ、富者を受け入れ、良民を受け入れ、頑固な人を受け入れ、清濁強いものも弱いものも一切この中に包み込まないものはない。うまくこれを包み込んで秩序を乱さず、向こう岸へ進むものを文明とするだけである。小さくて度量が狭い人は、一旦尊王の宗旨に偏ると、自由論を極度に嫌いその文字すら嫌がる。一

且自由主義に偏ると、君主や貴族を見ると自分の肩の上の重い荷物のように思い、一方から門閥はすべて廃止すべきというと、他方では民権はすべて押さえつけるべきと言う。なんとひどい狼狽をすることか。

物事の極端から極端にわたり、少しも認め合うことがない有様は、あたかも潔癖症の神経病の人が、汚れを洗って止まることがないようにものである。その馬鹿さ加減は笑えるし、その心は哀れに思える。単に哀れであるだけでなく、世の中の騒乱が起きる兆しは大抵こうした人から起きるので、その点を考えるとまた恐るべきものである。前に述べた英国の政權が常に新陳交代して国の安定を維持する理由を明らかにしたが、今の人類の心情を調べることも緊急に大事なことである。

旧を嫌い新を悦ぶ  
心情

第1、旧を嫌って新を喜ぶのは人の心情である。山に住む者は海を喜び、海辺に住む者は山を好む。衣服、飲食、住居も慣れると次第に新しいものを好むようになる。或いは新陳循環して再び旧に出会うと、しばらくの間途絶えていたので、また新しいものとして楽しむことができる。衣服や首飾りの流行のように、年々歳々目新しさを考えて、その工夫に行き詰ると、数年前の古くなったものに立ち戻って人を喜ばすものが多い。

そうすると、物事の好き嫌いは、その物事の性質にあるのではなく、自分の信条の変遷にあるといえる。いわゆる従的なものでなく、中心的なものである。今一国の人民の心情でその国の政治を見ると、やはりそうしたもので、必ずしも治風の性質に関わらず、単に旧を嫌って新を待つ気持ちがないわけではない。年々歳々同一の有様で、社会に事件もなく、官吏の罷免もなく、常に従うべき道に変わりなく、世間の平穩を関与しないで見ているだけで、巡り巡って極まることもないのは、情としてできないことである。

政治を悦ぶ心情

第2、今の社会で一国政府のことに関するのは、人情が最も悦ぶことである。世には芝居を好む者も少なくない。婦女子はもちろんのことで、学者や紳士に至るまで、風雅な人も俗な人もともにそれを喜ぶのは、各々見るところがあるためである。しかし、その観客の中で、最も楽しみを感じるのは狂言の作者で、自作の芝居を見る人である。作者が数日前筆を取って、窓際に独り座って、工夫をめぐらし、どのように愚かな君主に贅沢をほしいままにさせ、宝物をどのように隠して、どのように紛失させ、美人が薄命で、忠臣がおちぶれて、残念がり、その結末で、大盗賊は討たれて、顔氏は長生きなど心の中でその生死を想像して、そ

れを一場に表して、多くの人々の喜怒哀樂を自由自在に操るその楽しみは、ほとんどたとえようがない。

今政府の立法行政は、この作者と役者をかねるもので、社会で行われるものは全て自分の想像の中にあるものである。去年偶然の発意で、これを議決し、施行して、今年実際に行われて千万人の喜怒哀樂を支配した。今日の事実を見て感じるものがあれば明日からその改革を工夫し、功績の成否を試すことができる。あたかも一国の社会の劇場に立って、人の禍福を操作することなので、これに当たれば誰でも愉快になる。ましてや社会の実際の劇を工夫し実行することになればなおさらである。人民が熱心に参政を希望し、その地位が社会最上の地位とするのも理由がなくはない。それが社会の好位置であれば、その地位にいる者は、あたかも宝を抱いて人に示すようなものだから、傍から見ていてこれをうらやましく思うのも人の人情である。

羨ましがるのでなく、妬む心情

第3、他人の宝を見て羨ましがるのは人情の常としてそれを許すとしても、凡人の心中には人にいえない悪性がある。自分に利益になるものがなく他人の利益を奪う情である。彼に取って代わろうと言うのでなく、彼が倒れればいささかでも世間の人々の心が慰められると言う悪念である。確かに羨むというのは、自分の有様を上達させて他人と同等になろうと願うものだが、自分に利益がなく他人に損をさせようとするのは羨むことでなくて妬むことである。羨むと妬むとは大いに異なり、混同してはならない。

例えば、貧富が軒を並べて、その貧者の私心を叩いて胸中に思うことを述べさせれば、その貧者が隣の金持ちに代われるだろうか。または自分に富が合って隣の富と対立するのは、もちろん願うものではないが、もしも富で互いに対立できなければ、隣を貧しくして貧と貧が対立しても少しでも満足だと言うことになる。極めて卑劣な思想で、紳士が語るべきほどのことでもないが、残念ながら、今の凡人の世界では実際にあることである。火難、水難、愛児を失い、夫と別れるなどいずれも人としての不幸で、その不幸に落ちた人が他人の不幸に接して、ともに身の上を語ると、その心は符節があったようなもので、俗に言う悔やみ話の話があうもので、互いに親しみ合うのが常である。同情相憐れむというものである。これが事実としてそうなるときは、禍福を別にして情が同じにならない場合は、相憐れむ気持ちが薄く、かえって妬ましい心情がないこともない。この妬ましい気持ちを満足させるには、きっと自分に利

益はなくても他人が損することがあれば、一時的な平和を得ることが出来る。

今、一国の政權を取って、事を決めまたは施行するときは、俗世界で最も榮譽になるもので、俗人の目で当事者を見ると、無上の幸福を得たものだから、これを羨むだけでなく、或いはこれを妬む気持ちもないわけではない。平凡な人の心の様子は怪しむほどのことではない。かつ、社会にいて生まれてこのかた地位を得たことがない者は、貧賤であっても、これに慣れて不満足の意味を知らない者も多いが、一旦富貴になって更にこれを失った者は、生涯その昔のことを忘れられずに、しばしば危険を冒す者がいないわけではない。難破した船の船頭は、きっと無理に金策して、再び粗悪な船を作る。投機の商法により、一度は成功して後に失敗したものは、きっとまた無理して投機に走らざるを得ない。

政治の社会もこれと異ならず、社会の中で最も不平がひどく危険な者は、以前好位置を占めていたがこれを失ったものである。例えば我が日本で言うと、免職された官僚を始め、全国の士族は大抵この類に入る。この類の人々は、世界諸国にも大変多い。いずれも皆、政府に地位を求めて、枢要な地位にいる人と交代することを望み、たとえ自分からはこれに代われなくても、新陳交代のときに地位を失う人がいると、心の底では多少の快感を覚える人である。結局、政府の改革を嫌う者は少なく、これを企画するものはとても多い。今の世界の人情では、改革は避けられないことである。

他人の困難を悦ぶ  
心情

また第4に、自分の身には少しも関係なく少しの損得もないが、ただ漠然と他人の困難を見て喜ぶものが少なくない。人類以下の動物に対するいわゆる無益な殺生がそれである。その無益さを知らないわけではないが、残念ながらこれを好む者が多い。またこれも今の世の人情だろうか、独り動物だけでなく、同類の人に対しても情けがないことがある。にわか雨で人がうろたえるのを見て喜び、旅人が犬のほえられているのを見て笑い、堂々たる武士が落馬して衣装を汚し、色っぽい美人が車から落ちて醜態を見せるなど本人にはこの上ない難儀でも、全て道端の人にはちょっと面白いことになっている。

さらに甚だしいのは、火事を見物するものである。人が家を焼いて財産を失い、老若男女が慌てふためいて走り回る有様は、生涯の大災難といえるものだが、遠くから見物する人は、少しも心に感心せず、昔から向

こう側の家事を見て笑う者はいても泣く者を聞かない。それだけでなく、出火と聞いて見物に出かけ、急に鎮火すればかえって大いに落胆し、その顔色が不平な者がいる。人間の心には実に驚かされる。そして、その心が動くところはもともと羨むわけでもなく、妬むのでもなくて、ただ一時の興を催すだけのことで、世間の古今の事実がそうである時は、これを一種の人情と言わざるを得ない。京都の俳人梅室の句に「愛想にも一つ転べ雪の人」というのは、これらの人情を写したものといえよう。その意味はとても深い。故に今、政府の改革についてそのための何の損得もないものでも、当事者の新陳交代によって、急に失職した人を見るのは、あたかも人民のために落馬、落車、雪に倒れる人のように一興を催すもので、老練なわきまえがある学者かまたは政府に直接間接に関係あるもの以外の庶民でだいたい喜ばない者はいない。これもまた、政府の永続を妨げて改革に支障が生じる事情である。

長期政權の变革を  
望む人情

以上列挙したように、政府の改革を好むのは世界中普通の人情で、ことに 1800 年代の文明の進歩に際しては、その变革を促す勢いも日に日に強くなっている。仮にも政府を立てて一定不変の治風に従い、これを長く続けた例は、1700 年より先未だ近年の文明にあわなかった時代でも、才知に優れた君主が独り政權を握り、恩恵と威光によって万民を統制支配した者のほかにはない。今日では、たとえ賢く優れた君主でも、文明の風や波に耐えるのは容易なことではない。ロシアの今の皇帝のようなものだ。生まれつき才知が優れていてその教育も尋常でなく、欧州の諸帝と比べて決して一步も譲ることがない人物であるが、その政治に困り果てることは前に述べたとおりである。

ましてや君主自らは政府の実權を取らず他に任せて英国のような場合でもそうである。国を平安に収める方法は、ただ時代に従って政權を受け渡す方法があるだけである。このことは東西で昔から今日まで、未だ人が言わなかったことだが、これを明言しないだけで、事実においては、歴史上でも行われて、人もまた暗に論じているものである。世にときめき栄えるのは長く続かないと言い、功なり名を遂げて身を退くのは天道というのは、功勞があった臣下が自分を戒める言葉で、きっとこの意味なのだろう。

本来、古代の中国日本と今の西洋諸国を比較すると、その社会の仕組みも異なり、今の西洋では一つの政党について論じ、昔の和漢では一個人について言うことだが、その言葉の意味を広く考えると、政權が落ち着

くところは一箇所に定まって、長い間不変の状態にあるときは必ず様々な故障が生じて禍が起きると言う意味を表すものに他ならない。昔と今の状態も自然と期せずして一致することがあることが分かる。

また、国家創業で様々な事がある時に、才能がある君主と賢い大臣たちが力を合わせて、国事を整理し、その首相が長く地位にいて補佐の功績をなした例が少なからずあるが、太平無事の天下に名臣の補佐役が十数年間もうまく重要な地位を占めたというものは歴史上まれである。ただし武功があった元老、唐の郭子儀、輩度などはかえって重要な機密に関与せず例外であるが、純粋な文官で天下の政權を一手に握り、長くその地位を保とうとするのはほぼ難しいことで、もしこれを強いて保とうとすると、必ず心が捻じ曲がった人の名をこうむることになる。唐の李林甫、宋の秦檜などがこれである。

秦檜の悪は外国交際に関することで、これは別に議論することにして、今、李林甫が悪名を得た由縁を調べると、古今の歴史によれば、その罪は言語を塞ぎ途絶えさせて、賢くて才能ある人を嫌い、しばしば重大な犯罪を起こして人に危害を加える云々といつて、専らその心が陰険なことを憎むのである。私もまた、論者と同じ意見で、決してこの罪人の見方をするわけではないが、考えてみると、林甫が言語を絶ってしばしば大疑惑を引き起こしたのは、その性格が陰険なためにことさらに人に危害を加えて愉快になったのではない。ただその地位を固くしようと望む一念で、やむを得ずにこうした残酷な罪を犯しただけである。

この時に当たり、天下泰平も長く、志ある働き盛り、学者、論客たちは、あたかも無事に苦しめられて、ほとんど身を楽しにする場所もないような最中に、林甫独りが全権を持って 19 年間も地位にあったという。これを羨まない者がいるだろうか。これを羨み、妬み或いは激論でこれを犯す者もいるだろう。或いは陰謀を企てて、これを倒そうとする者もいるだろう。甚だしい者は暗殺を考えた者もいるだろう。この人心の波乱を沈静させようとするなら、速やかに辞表出して、冠を架けて去るべきだが、林甫の策は、そのようにしないで、少しも憚ることなく、毅然と地位に着いたままで動かないのは、陰険でなく屈強剛腹と言える。ゆえに林甫の罪は、地位を貪ることであって、その残酷陰険な挙動は、つまるところ、地位を固める方便だけである。仮にも地位を固くしようとするには、人を倒さざるを得ない。人を倒さなければ即座に倒されるのは必定である。二者のうち一つも免れることができない。

或いは天性の性質が林甫のようでない人物でも、林甫の権力をとって19年間地位を保とうとすると、きっと林甫の策を学ぶことになる。勢いがそうさせるので、人の罪ではない。その本人のためにも取らず、社会のためにもまた不幸と言わざるを得ない。

私も若い時、和漢の歴史を読んで楽しくなかったことがある。名臣の良輔がしばらく地位にいとたちまち退けられて、他人がこれに変わっても長くいられない。歴史の中で連なるものは皆同じ状態だった。まことにもどかしい感じがした。時として齒軋りして残念がり、本を投げ飛ばして怒ることもあった。しかし今になって考えると、その地位に長くいないのは名臣たる由縁であるとわかった。李林甫のような者も宰相として3年で地位を去ったならば、或いは唐代の名臣の列に入って、後世の史論家に惜しまれることもあったろう。遺憾なことである。そうならば、随時に政権を受け渡す上で必要なことは、1100年の昔から事実として変わらないことを知るべきである。今の活発な世界では言うに及ばない。1800年代の後では、ますます急になっている。

英国の歴代首相の  
在職期間

更に前の事実を明らかにするために、英国で行われた政権授受の期限を示して、その実施を証明したい。アメリカ合衆国は四年ごとに大統領を改選し、そのために内閣の諸卿も一新する決まりであるが、英国ではその年限を定めず、内閣の執権（プライム・ミニスター、太政大臣ともいえる）を始めとして、諸卿に至るまで終身在職しても妨げないが、事實は決してそうならない。次の表は1784年から1879年まで96年間、同国の大統領が新陳交代した年月日と在職の期限を示したものである。

就職の日	在職の時限	大統領の人名
1783年12月23日	17年84日	ウイリアム・ピット
1801年3月17日	3年56日	アジントン
1804年5月15日	1年241日	ウイリアム・ピット
1806年2月11日	1年64日	グレンウイル
1807年3月31日	3年102日	ポルトランド
1809年12月2日	1年350日	ペルセウル
1812年6月9日	14年307日	リウルブール
1827年4月24日	121日	カニング
1827年9月5日	168日	ゴデリック
1828年1月25日	1年301日	ウエリントン
1830年11月22日	3年231日	グレイ

1834年7月18日	128日	メルボルン
1834年12月26日	131日	ロベルト・ピエール
1835年4月18日	6年138日	メルボルン
1842年9月6日	4年295日	ロベルト・ピエール
1846年7月6日	5年173日	リュッセル
1852年2月27日	293日	デルビー
1852年12月28日	2年37日	アベルデイーン
1855年2月10日	3年24日	パルマストーン
1858年2月25日	1年104日	デルビー
1859年6月18日	6年122日	パルマストーン
1865年11月6日	242日	リュッセル
1866年7月6日	1年241日	デルビー
1868年2月27日	235日	ジスリエリ
1868年12月9日	5年7日	グラッドストーン
1874年2月21日	在職中	デスリエリー

以上 96 年間に政權交代は 26 代、在職期限の短いものは 121 日、長い者は 17 年 84 日、5 年以上の者は今の執權デスレイリーを合わせて 7 名、10 年以上の者は 2 名だけである。またこの 96 年を 26 代で平均すると、1 代在職の期間は 3 年 6 部 9 厘余に当たり、これをアメリカの四年在職のもと比べると、その交代がかえって速やかなことが見られる。そもそもアメリカ建国のときに政体を作って、大統領の任期を 4 年と定めたのは、きっと偶然ではない。当時の諸氏が、世界の古今の形成沿革を調べて、一国政府の枢要なことに關する者は、その地位を長くすべきでないという事実を発見し、これを議決して国法にしたものだろう。

ただ英国では、交代に關する国法や約束はないが、その政權を交代することの実際はアメリカと違わない。これもまた偶然ではない。結局、英国時代の実験を経て、ついに一種の治風を作り、当時の国の安定を維持して社会の反映を助けたものだから、これを大事業といわざるを得ない。そうであっても、その治風なるものが、1800 年代の今日にいたり、特に文明進歩の時勢に適合して、少しも社会面に震動を感じない素晴らしい実績は、ひょっとしたら先人も思っていなかったことだろう。先人は、今日の文明を前もって知ることがなかった人たちである。これを前もって予知せずにこれに適した治風を残したのは、偶然の賜物というべきである。私が特に英国政治を賞賛するのも前に述べたとおりこの一点にある。

日本の老中勝手方の在職期間

また、随時に政権交代することが極めて大事で、成文の規則や約束の有無に関わらず、必ず事実として行われる証は、西洋諸国に求めないでも、近く我が日本の先例を見て知ることができる。日本で徳川の初年は幕府も諸藩もいわゆる明君賢相が一緒になって事をなすものが多く、政権は全て君主の手にある時代だから、これは例外として置いて、その後太平の日が長く続くと明君もはなはだ稀になった。その明君が乏しい時代に、諸藩では家老でも用人でも、藩政の実権を握る者が、10 数年間も在職した例は極めて稀だったようである。

私は長い間このことに注意して諸藩の古老に質したが、みなそうでなかったものはいない。執権の重臣は、1年で辞職し3年で退けられて、ひどいのは藩中のうわさが沸きあがってこれを悪くみをする家来と名付け、不忠者と呼んで、そのためについに謹慎を命じられて、その代わりに職につくものは、たちまち前年同様のさしさわりにより禁固させられた重臣でこのたびの再度の勤務こそ無罪が明らかになって愉快であると、得意になっていた月日もそれほど長くなくて、再び風雨にあい、地位を全うできなかつただけでなく、その身も全うできなかつたその事情は、各藩とも割符を合わせたように同じだった。

ただし、諸藩のことは広くて調査するのは容易なことでなかつた。先日幸いにも徳川幕府のご老中、勝手方の在職年表を手にしたのでこれを以下に示す。

就職の年月	在職期間	御老中勝手方姓名
宝暦 12 年午年 12 月	16 年 7 月	松平右近将監
安永 8 年亥年 7 月	2 年 2 月	松平右京大夫
天明元年丑年 9 月	5 年 10 月	水野出羽守
天明 7 年未年 7 月	2 年 5 月	松平越中守、水野出羽守
寛政元年酉年 12 月	2 年 8 月	松平越中守
寛政 4 年子年 8 月	11 年 4 月	松平伊豆守
享和 3 年亥年 12 月	2 年 4 月	戸田采女正
文化 3 年寅年 4 月	10 年 4 月	牧野備前守
文化 13 年子年 10 月	1 年 4 月	土井大炊頭、青山下野守
文政元年寅年 2 月	16 年	青山下野守、水野出羽守
天保 5 年午年 2 月	3 年 1 月	大久保加賀守、松平周防守
天保 8 年酉年 3 月	6 年 6 月	水野越前守
天保 14 年卯年閏 9 月	10 月	水野越前守、土居大炊頭
天保 15 年辰年 7 月	16 年 5 月	阿部伊勢守、堀大和守

万延元年申年 12 月

以下慶応 3 年までも 7 年間は、幕府の末期、国事多端で御老中の進退もほとんど一定しなかったので、在職期間もこれを略す。

安藤対馬守、水野和泉守、松平豊前守、板倉周防守、松平紀伊守、松平周防守

宝暦 12 年 12 月から慶応三年に至るまでの 150 年間、御老中勝手方の在職は 20 代で、平均すると 1 代の期間は、5 年 2 分 5 厘だが、万延元年安藤対馬守以下 6 名を除いて、宝暦 12 年 12 月から万延元年 11 月までの 98 年間を見ると、在職 14 代のうち長いものは 16 年 7 月、短いものは 2 年 2 月、天保 14 年から 15 年までの 10 月の者もいるが、同勤の 3 名のうち、水野越前守は全権で、天保 8 年から始まったので、実質は 7 年 4 月である。またこの 14 代のうち、10 年以上の者は 5 代で、5 年以上が 7 代である。この総数を 98 年で平均すると一代の在職はまさしく 7 年で端数がない。

以上 7 年の年数は、アメリカやイギリスと比べると緩慢に見えるが、別に勘定奉行の新陳交代を見れば、とても速やかなものである。旧幕府の古老の意見を聞くと、徳川幕府も太平の時代になると、将軍自ら事を行わないようになり、専ら権力が落ち着くところは御老中、若年寄り、お勘定奉行にあった。そうしてこの 3 役の中に各々お勝手方なる者がいて、会計を統括した。最も権力があつた。故に御老中のお勝手方は、政府最上の権力があるところとしてみられている。また、勘定奉行も、公事方とお勝手方に分かれて、公事方は専ら地方の裁判を司り、お勝手方は金銭と米穀を司って、全権はお勝手方にあつた。

若年寄りは御老中の次席で、位は高いが実力ではしばしばお勘定奉行には及ばないものがあつた。全ての権限を持つお勘定奉行は、その名義はお勝手方であるが、権力の範囲はとても広くて、金銭と米穀の出納はもちろん、およそ政府の機密に一つと仕手関係しないものはなく、幕臣の任免も実際にはその手になるものが多く、かつその人物は必ずしも高禄の旗本に限らない。しばしば卑しい身分から立身してその身分に上るものが多かつたので、よく世間の事情に通じていて力も活発だつた。

これに反して、御老中はいわゆる大名で、ややもすると民間の様子を知らず、そのために御老中でも逆にお勘定奉行に頼る者が出るほどの勢いだつた、という。このほかに大目付、お目付けなども権力があつたが、

結局表役だから、成文の規則を守って維持するだけで、随時にことを思うままに動かす地位ではない。また内向きに、お側取次ぎという者がいて、とても有力な者に似ているが、その力はただ將軍のそばにいるために得られるもので、広く政府で事をなすものではない。そのほか、御奏者番とか諸番頭などは少しも政府の機密に関する者とはいえず、全く無力な者であった。

以上の次第でお勘定奉行は、幕臣の多くの人の目があるところで、旗本、御家人の有志が生涯にわたり高い青雲を志してそれが目的にするのはこの地位に昇ることにあった。羨む者が多く、妬む者も多く、それに代わろうとする者も多く、これに代わらなくてもその人が失意の状態にあるのを見て喜ぶ者が多かった。結局、一身で長年にわたって持続できる地位ではなかった。その事実を明らかにするには、文政元年から慶応 3 年までの 50 年間でお勘定奉行のお勝手方は 36 名いた。2 人勤めだからこれを半分にして、在職の新陳交代は 18 代となる。これを平均すると、在職の一代は 2 年 7 分 7 厘となり、永続が難しかったことが分かる。

政治中枢以外の職  
には終身官もいた

これに反して、ご奏者番、諸番頭などは、ほとんど終身官のようで、他の役に昇進しなければ、10 年、20 年も 1 箇所止まって動かなかった。そのひっそりとしたさまはあたかも山の中に住んで事もなく、人が訪問することも無い者のようである。考えると、英米諸国では、司法官は大抵終身官で支障もなかったが、その原因は事務が静かだったためか。もともとかの司法官と日本の御奏者番またはお目付けなどを比較するとその性質は全く異なるが、西洋諸国では、議会、行政、司法の三権がその境界も明確で、司法官の仕事はただ一定の法律を守ることだから、自然と社会に対して権威で従わせることが少なくなる。人民が注目して最もわずらわしいのは、議会、行政の中枢にあるといえる。

英国の治風が優れ  
ている

本章の始めから述べた論の大意を述べると、1800 年代にあって文明に突き当たっても震動を感じなかったのは特に英国政治であった。英国の政權は保守と改進黨の 2 党派に属し、一進一退その政權交代ははなはだ滑らかである。政權は全て人民に帰すといえども、尊王の意向もまたはなはだ厚い。随時に政權交代することの大切なことは、世界の人情を推し量って知ることができる。これを挙げれば、4 条に分けられる。このことの大切さは、独り西洋諸国だけでなく、古代の和漢でもその実際が見られるとの趣意で、私の所見は特に英国政治の機転を褒めるものである。今後の世界諸国で、仮にも 1800 年代の文明を利用する者は、きっと英国の

治風に倣って、始めてうまく人民の不平を慰めて国の平安を維持できる。

今の世界の人々から不平不満の原因を取り去ろうとするには、もともと人力でうまくできるものではない。イギリスの治風に従えば不平論がなくなるわけではないが、不平論でも正論でもその論議が力を得れば、即座にその力を強くし、一時的な平和が得られて、またしばらくして一方の論議が騒々しくなれば、それに権力を譲ってその力を強くし、あたかも政府が一新するたびに、不平の実を取り除くわけではないが、人の目をくらまして忘れさせたようである。その一新の時期は、古い不平が衰えて新しい不平が正に熟した時である。その政府が持続する期限は、この新しい不平を紛らわして、更にまた他の新不平を養成する期限である。それはあたかも去年の古い穀物を食べている間に、今年の新穀物が次第に熟するようなものである。その新旧の季節を誤らずに互いに交代する働きは、機転の優れたところといえる。

国会開設は時間をかけて行い、長期政權に陥らない政權交代が重要

我が日本でも、国会を開いて立憲政体を立てる必要があることは朝野ともに分かっているところで、これまでそうでないというものの話を聞いたことがない。或いは世の中の論者が国会に設立をもっと早くといい、徐々に進めるべきといい、ゆっくりその用意をすべきといい、全てこれを急にしないのは、実に老練な工夫で、私もまたこれに同意するが、論者がこれを急にしない理由を述べて、その証拠を聞くと、かつて英国で国会設立の沿革はそうだったという。フランスで急にこれを設けようとしてあれこれの災害があったといい、いずれも皆近年の文明がなかった以前の事実を引用して、それで今日のことを判断するようである。確かに、論者は漠然と西洋文明を知っていて、それが 1800 年代になって面目を改め、あたかも人間世界をひっくり返した事実を忘れていないだろうか。

我が日本は、すでに最近の文明を利用して、今日の有様となった。この日本のためを考えて、日本のことを判断するに当たり、今から 650 年前の国王ジョンのときにマグナカルタに調印して、次いで 100 年が過ぎ、300 年を経て次第に人民が自由を得たというようなゆっくりした沿革を論じて、それで今日のことを徐々に説明する上の引用に使用するのには、結局無益な空言で聞くに堪えない。いわゆる芋虫の事情を説いて蝶に話すようなものである。誰が耳を傾ける人がいようか。

試みに見るといい、我が日本は開国 20 年の間に、200 年のことを成し遂

げたではないか。これは皆近年の文明の力を利用してそうなのである。本編第 3 章の始めに、昔の人が 70 年の年齢をかけてなした事業は、今の人には 3 年間で終わることができるというのはこのことを言う。この長足の進歩のときに当たって、国勢も一変し、遅かれ早かれ国会を開く日が来るのは、全く疑いようがない。ただその時に、政權を得た者が、永世不変を図ることなく、ことの始めから、しばらく後には必ず交代する者と覚悟して、あたかも政權の上に長居をする弊害がないように希望するのである。本章の趣意はただこの一点にある。

(了)